

松岡 司 著

# 南海地震と 災害をたどる

— 残された教訓 —



過去を知り、災害に備える為に、

高知柏ライオンズクラブ結成四十周年記念事業の一環とし、併せて、  
ライオンズクラブ国際協会百周年を記念して刊行する。

高知柏ライオンズクラブ 第四十四代会長 三谷勝水

南海地震と災害をたどる  
— 残された教訓 —

## 目 次

1	序	過去に学ぶ積極的対策・4
2	昭和地震① 概要	軟弱な地盤 被害大きく・6
3	昭和地震② 高知市 (その1)	上流と下流 振幅の差・8
4	昭和地震③ 高知市 (その2)	堤防決壊、陥没 追い打ち・10
5	昭和地震④ 高知市 (その3)	奥広い浦戸湾 津波拡散・12
6	昭和地震⑤ 宇佐 (その1)	U字形湾で威力増す津波・14
7	昭和地震⑥ 宇佐 (その2)	「即、山へ」住民に浸透・16
8	昭和地震⑦ 須崎 (その1)	津波逆流 予期せぬ被害・18
9	昭和地震⑧ 須崎 (その2)	発生前夜 枯れた井戸・20
10	昭和地震⑨ 黒潮町	家屋倒壊 砂地に集中・22
11	昭和地震⑩ 中村町 (その1)	泥土の地盤 振動にもろく・24
12	昭和地震⑪ 中村町 (その2)	家屋倒壊 幅多の過半数・26
13	昭和地震⑫ 中村町 (その3)	消火難航 163軒焼失・28
14	昭和地震⑬ 唐船島	岬が隆起 港は機能不全・30
15	安政地震① 概要	前日の東海地震と連動・32
16	安政地震② 高知城下 (その1)	郭中・町家も被害大きく・34
17	安政地震③ 高知城下 (その2)	津波の高さ物語る碑・36

18	安政地震④	高知城下（その3）	地盤沈下 浸水に拍車・	38
19	安政地震⑤	高知城下（その4）	高知の繁華街 丸焼けに・	40
20	安政地震⑥	高知城下（その5）	5年に及ぶ余震記録・	42
21	安政地震⑦	岸本	潮田に海水 船は陸に・	44
22	安政地震⑧	夜須・手結	堤が決壊 蔵ごと流失・	46
23	安政地震⑨	甲浦・野根	船流失 おびただしく・	48
24	安政地震⑩	宇佐	橋落ち波から逃げ切れず・	50
25	安政地震⑪	須崎	海に向かい犠牲も・	52
26	安政地震⑫	幡多沿岸	猛威伝える巨大な碑・	54
27	安政地震⑬	中村・宿毛	倒壊家屋から火災続出・	56
28	宝永地震①	概要	津波被害 土佐湾岸全域で・	58
29	宝永地震②	高知城下（その1）	城の櫓門や石垣壊れる・	60
30	宝永地震③	高知城下（その2）	地盤 最大2メートル沈む・	62
31	宝永地震④	高知城下（その3）	津波 大手門前まで・	64
32	宝永地震⑤	高知城下（その4）	近くに山なく逃げられず・	66
33	宝永地震⑥	南国市南部	農村 浸水で回復困難・	68
34	宝永地震⑦	東部海岸	巨木 根元から流され・	70
35	宝永地震⑧	室戸半島	隆起「安政」上回る・	72
36	宝永地震⑨	宇佐	背後に水 逃げ道失う・	74

37	宝永地震⑩	須崎・野見両湾	浅い水深 亡所と化す村・ 76
38	宝永地震⑪	久礼・上ノ加江	波は山まで届いた・ 78
39	宝永地震⑫	幡多沿岸（その1）	軟弱地盤 倒壊相次ぐ・ 80
40	宝永地震⑬	幡多沿岸（その2）	海拔15メートルの宮流される・ 82
41	慶長地震		宝永地震を超える被害・ 84
42	正平地震		南国の大寺津波に襲われる・ 86
43	康和地震		浦戸湾周辺 地盤沈下か・ 88
44	白鳳地震		田1000町歩が海に・ 90
45	地震のまとめ		有史の時代 2000年に満たず・ 92
46	昭和50年5号台風（その1）		集中豪雨 強風被害も・ 94
47	昭和50年5号台風（その2）		総雨量600ミリ 斜面崩壊・ 96
48	長者地滑り		今なお懸命の対策・ 98
49	加奈木大崩壊		泥岩、砂岩 地盤もろく・ 100
50	奈半利川洪水		3年に1度 水あふれ・ 102

主な引用・参考文献・ 104

記載の南海地震・津波年表・ 107

付録「谷陵記」・ 109

あとがき・ 128

# 1—序

## 過去に学ぶ積極的対策

政府の中央防災会議は平成25年5月28日、「南海トラフ巨大地震対策について」の最終報告を公表した。「トラフ」は海溝に比べ広くて浅い「舟状海盆」の意。

報告によると、震度最大値の場合、高知県では高知周辺と東西の岬周辺が7となり、のこる区域のほとんどが6強となつてている。これは、阪神間及び淡路島の一部に7の激震をみた、同7年の阪神淡路大地震を超える規模といつてよい。

また津波は満潮の場合、県下沿岸にくまなく押し寄せ、最悪のケースでは県西部のほとんどが高さ20メートルを超えて、のこる沿岸も10メートル以上は覚悟せねばならなくなつてている。甚大な被害が予想され、これについて同月15日更新の高知県ホームページ「高知県版・南海トラフ巨大地震による被害想定について」は、次の最大被害の数字を出した。

死者 4万2千人

負傷者 3万6千人

地震による建物全壊 約8万2千棟

津波による建物全壊 6万6千棟

これから述べてゆく、昭和の南海大地震をはるかに超える被害の予測である。

目を疑うほどの高い数字となっているが、ただこれは、あくまで最悪のケースで、必ずこうなるというわけではない。震源、時間帯、避難訓練の有無など、諸条件によつて大きく違つてき、その意味で私たちは日頃から積極的に対策を考えておく必要があろう。



巨大地震の震源域（外側の太線内）は広範囲に及ぶ（地震調査研究推進本部の公表資料より）

同25年5月24日、文部科学省の地震調査研究推進本部は今後30年以内の南海トラフの地震発生確率について、60～70パーセント程度とした。

今度襲つてくる南海地震は東南海地震・東海地震と連動、あるいは同時発生という、日本最大級の地震となる可能性が強調されている。そのわけを探るひとつとして、土佐の地震史をさかのばつてみよう。

◆◆◆  
南海トラフ巨大地震に備える動きが進んでいる。高知は過去にも様々な災害に見舞われてきた。県内に残る石碑や記録を辿り、未来への教訓とする。

## 2—昭和地震① 概要

### 軟弱な地盤 被害大きく

今から70年前。昭和21年（1946）12月21日未明、東経135・6度、北緯33・0度を震央と推定する昭和南海地震が起きた。地理的には潮岬沖約50キロの地点だ。高知測候所の計測では午前4時19分38秒0の発震で、微動時間約20秒、体感する最大激震は同20分頃であつたらしい。

地震の規模を示すマグニチュードは8・0ないし8・1とされ、巨大南海地震の歴史では規模の小さい方だった。

とはいえて2年前の同19年には、名古屋付近に大きな被害をもたらした東海地震が発生しており、その関連性は十分に考えられよう。

故高知大学名誉教授甲藤次郎理学博士らが国内に普及したプレートテクトニクス（地球の岩盤移動理論）によれば、南海・東南海・東海地方の陸域はユーラシアプレートに属しながら、すぐ沖の南海トラフは別のフィリピン海プレートとなつていて。両プレートのせめぎあいにより、南海から東海地方にかけて連動するわけだ。

そして昭和南海地震は、フィリピン海プレートの沈み込みへの反発をもつて、陸側プレー

トである室戸岬と足摺岬の隆起に結びついた。

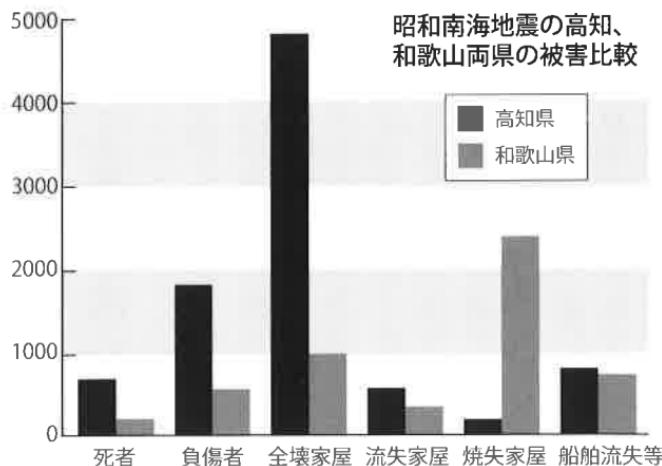
被害は、ひとつに地盤の軟弱な高知市・中村町（現四十市内）など、震度6から7を示した地域で大きく、もうひとつ、佐賀（現黒潮町内）の波高値5・3メートルのように、津波による沿岸部が大きかった。

別表は、内務省が発表した高知・和歌山両県の被害件数をグラフ化したものである。東海から九州までの中で大被害を出した両県ながら、比較すれば、大火災の発生によつて2千軒を超えた和歌山県の焼失家屋を除くと、高知県がすべて上回つていた。

*This disaster was probably the worst that has over struck this prefecture,*

〔『南海大震災誌』〕

「この大災害は、おそらく本県を襲つた最悪のものである」。GHQ高知民事部長アクセルソン中佐がこういふのほつた実態は、各地でどうだつたらう。



## 3—昭和地震② 高知市（その1）

### 上流と下流 振幅の差

「次女を救いに行つて、抱き上げようとして、始めて左腕を失っているのに気がついた」

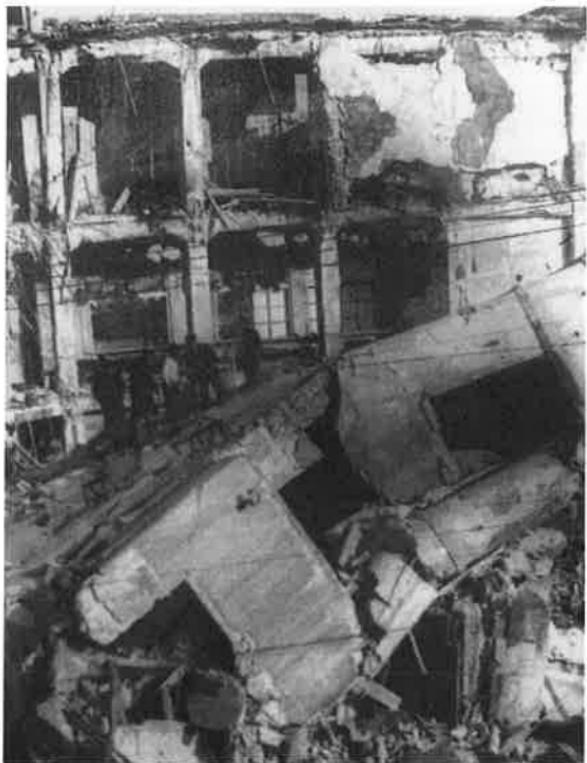
高知市内の文化ビル3階に住んでいた彼は、意識が戻ると、激震で抜け落ちガレキと化した床の上にいた。脊椎まで折つていながら、泣き叫ぶ次女の側へ必死に寄つていた。このとき長女を圧死させた、読売新聞記者熊倉一夫の3年後の回想だ。

昭和南海地震は、戦災でわずかに残る高知市内の建物を、特に東半街区において激しく破壊した。文化ビルのある堺町を含む南街、そしてその北方に位置する北街、すなわち、今のが駅前南北をつらぬく電車通り周辺から東の街区が、家屋の密集区であることも重なって最も甚大な倒壊を招いた。

また、ここを三方から囲む下知・江ノ口・潮江3地区を含め、高知市の建物倒壊は、鏡・江ノ口両河川の下流域に集中していた。最大の原因是、この地域が地盤の軟弱な沖積層から成り、よつて震度6から7に及ぶ、最大の震度に見舞われたためだった。

故高知大学教授沢村武雄が、東大地震研究所と京大防災研究所の調査結果を要約したものによると、下流域と上流域の興味深い差がわかる。

市内山ノ端町の岩盤上に建つ駐在所での余震の振幅を1とした場合、旭小学校が1・5倍なのに、追手前高校、九反田と下流域に近づくにしたがい4倍、6・5倍と高くなる。細かくみて倒壊率と厳密に一致しないのは、埋め立てか否か、粘土質か否かによるためで、概していえば、上流域より下流域ほど被害を多くしたのは確かだつた。



地震発生当日に撮影された倒壊後の文化ビルの様子＝高知市提供

高知市の死傷者及び家屋破壊は次のとおりだつた。

死者	231名
負傷者	334名
倒壊家屋	1105戸
半壊家屋	1957戸

## 4—昭和地震③ 高知市（その2）

### 堤防決壊、陥没 追い打ち

このとき高知市では、さらに次の建物被害を出している。

浸水家屋 1881戸

各地堤防に亀裂が生じただけでなく、国分川下流の葛島橋西側下手約100メートル辺りで決壊した。そのため、今の川添から稻荷町辺り一帯にかけて大海原となつた。戦災を免れていた東部は、倒壊に加える潮水の侵入によつて、さらなる追い打ちをかけられたのである。しかも、浸水は堤防決壊だけではなかつた。棧橋岸壁の大亀裂と陥没で目にできた高知市の沈下が、このとき各地の数字となつて表れた。

東大地震研究所は、翌22年3月末の高知市付近の地盤沈下量を公表している。

【東北部】	地蔵堂・石渕・薊野	66センチ	一宮	64センチ
【中央部】	県庁前・比島	68センチ	木屋橋	42センチ
葛島橋（堤防上）	91センチ	西孕	80センチ	
【西部】	旭町	67センチ		

【南部】	浦戸	70センチ
------	----	-------



葛島から見た国分川堤防と新葛島橋。震災当時は写真の中央付近（奥側）が決壊した

おおむね70、80センチ前後の沈下が理解される。建設省地理調査所においても水準点による比較をおこない、やはり高知市の25センチ沈下を明らかにしている。

原因は大陸プレートの先端部の隆起にともない、そのプレートの内陸側（北側）にあたる高知市が沈んだためだつた。というより地震が起つたことにより、盛り上がつていた高知の地盤が、ストンと元に戻つたといった方が良いかもしれない。

海拔の低くなつた高知市は、その分、滯水を余儀なくされ、高潮あるいは満潮によつてさえも浸水状態となる地域が増したのである。

同24年高知県刊の『南海大震災誌』は、高知の沈下は沖積層と埋立地だけかもしれぬという情報を公表した。やや慎重さを欠くものであつたといえよう。

## 5—昭和地震④ 高知市（その3）

### 奥広い浦戸湾 津波拡散

昭和地震では、高知市の流失家屋は1件も警察署への報告がなかつた。堤防決壩と地盤沈下、高潮によつて浸水はしても、津波に襲われて家が流失する被害はなかつた。市内は地震後4日ばかり後でも3、4千戸ほど水に浸かつていたが、直接、津波によるといふものはほとんどなかつたらしい。

東大地震研究所発表によると、このときの浦戸湾口部での津波の高さが、後日、計測されている。桂浜の坂本龍馬像の下から御畠瀬北端に及ぶ範囲で、平均水面上の高さが約1・3メートルから3・2メートルまで。仮に干潮だつたとすれば、水面から2・4メートルから4・3メートルだ。

つまり、高知市内での津波は、桂浜・浦戸・御畠瀬・種崎らの浦戸湾口にとどまつた。周知のとおり浦戸湾は狭い湾口を入れば奥が広くなつてゐる。津波のエネルギーは拡散されるわけで、高知市街にまで押し寄せる波の力はなかつた。

先の計測で、平均水面上の津波の高さが3・22メートルという最高値を出した浦戸で、実見した住民の声を聞いた。

151番地の長崎年子さん（85）は当時16歳。

「地震だ！」ということでバンジン様へ逃げ登った。誰と行つたか、一人だつたか、覚えておらず、ただ船・材木が右へ左へと流れていったのを、はつきり覚えちゅう。家は浸からざつた。

まちがない」

バンジン様というのは南裏山の小社。海拔10メートル位か。

265番地の吉松峰松さん（91）は22歳。当時からこの家にいた。2階で寝ていたが揺れで目が覚め、すぐ海辺へ出る。

「潮の流れを監視するのは浦人の備えじや。暗くてはつきりわからんが、水面が何か普段と違う。海水の動きゆうのが聞こえ、潮の込みと引きを知り、津波と直感した」

朝まで観察を続け、自宅前にあつた計測器も後で見たが、やはり道路さえも浸からなかつたそうだ。吉松さんは普段からの心掛けを強調する。



バンジン様の登り口。避難誘導の標識がある（高知市浦戸で）

## 6—昭和地震⑤ 宇佐（その1）

### U字形湾で威力増す津波

激しい津波が襲つたのは、高岡郡の新宇佐町宇佐（現宇佐市宇佐）と須崎周辺だつた。南海トラフに直面する本県において、震央を東部沖とした昭和地震は、海を東南に開く県西部に影響が大きい。両地はその共通する面がありながら、しかも被害の内容に大きな違いが出た。

新宇佐町。同じ海岸線でも、防潮堤・集落を高くする同町新居<sup>にい</sup>は津波の被害を受けず、高岡警察署の公表した次の数字はほとんど宇佐といつてよい。

死者・行方不明者 2

家屋倒壊 130

家屋半壊 812

家屋流失 341

家屋浸水 142

300メートルの防潮堤を破壊した津波は3度にわたり、1波は地震発生約10分後、2波はそれより約15分後、3波がそれより約20分後だつた。波高は後ほど高くなつて、4メート

ルを超える最高値が各所で示された。

しかも、宇佐の海岸線は緩やかなU字の湾を形成している。沖の波は進むごとに高さを増し、威力を増して街区を襲つた。地震そのものによる倒壊の少なかつた家屋に被害が相次いだのは、海拔3メートル位に過ぎぬここを津波が襲つたからである。

加えて興味深いのは、宇佐の東部に位置する旭町・橋田方面の家屋倒壊・流失が激しかったらしいこと。

中心部である東新町に住む人の家は、津波の跡を1メートル位の高さに止めるにすぎなかつたが、もつと東の東中町の住人に聞けば、1階襖の3分の2程まで浸かつたという。そして住人は、さらに東の旭町方面における被害を鮮明に記憶していた。港の船が押し上げられ、そのまま津波に乗つて次々と建物を破壊・流失した。家屋の惨状はそのためだったのだ。



津波に襲われた旭町＝土佐市防災対策課提供

## 7—昭和地震⑥ 宇佐（その2）

### 「即、山へ」住民に浸透

ところが宇佐での死者・行方不明者は、浜の防空壕跡へ向かつたという子ら、2人に止まつた。なぜか。

山手の東町にいた竹林美佐尾さん（81）は、「津波だ。逃げろ！」ということで7人兄弟が走つた。裏から山道を通り、遍路道である塚地坂を越え、3、4キロ先の塚地まで逃げた。下の子は2、3歳にすぎず、神社で休んだという。

今、夫の秀男さん（82）は、親が後背の山で芋など作る作業小屋を建てており、津波と知るや一目散でそこへの夜道を逃げ登つた。

西方である福島の造船所で働いていた浜口幸正さん（86）は、ドックの船が揺れだしたことで地震と気づく。浜へ向かおうとする1人を引きとめ、2人をつれて灘地区の山の竹藪へと向かつた。夜明けまで過ごし、津波の出入りを見ていたという。

共通しているのは、地震発生直後、皆、いっせいに山へ向かつていていることである。

県漁協宇佐統括支所の入り口に、昭和24年3月に新宇佐町が建てた「震災復興記念碑」がある。

碑は先ず、津波の襲来7、8回、第3波が最も大きく、山麓まで達する波は、人家を崩壊して巨船・流木を山間まで運んだと記す。続く、警察署の数字と必ずしも一致しない被害の中に、流失船舶300とあるのも注目されるが、さらにこう記す。

人の被害は死者・行方不明各一名のみ、往時より云い伝ふ、欲を棄てて逃れた者、命助かりしと、犠牲者の僅少はこの戒による



宇佐に建つ震災復興記念碑（土佐市宇佐町で）

宇佐は、後述する安政地震の津波でも大被害を被つていった。その経験を生かし、地震発生時には即、津波の襲来を予測して山へ逃げる。この教訓が住民間に浸透していた。何も考らず、身ひとつを守つてひたすら山へと走った。そこでほぼ全員が助かつたというのである。

県下大被害の地では見事な対応だった。

## 8—昭和地震⑦ 須崎（その1）

### 津波逆流 予期せぬ被害

須崎町と多ノ郷村（共に現須崎市）。

宇佐とならぶ津波の大被害が出たのは、この2町村だつた。

あわせて1万人を超える罹災者、500を超える流失船舶の数でも規模が想像されようが、須崎警察署公表の、次の須崎町の数字をみれば、宇佐との大きな違いに気づく。  
死者・行方不明者 56  
家屋倒壊 136  
家屋半壊 218  
家屋流失 45  
家屋浸水 1089

宇佐は家屋を失うケースが多かつたのに、須崎町は浸水に止まる割合が高かつた。なのに、須崎町は56名に及ぶ死者・行方不明者を出した。宇佐は間髪を入れず山へ逃げたのに、須崎町は逃げ遅れて津波に呑まれる人を出したのだ。須崎八幡宮の境内にある追悼碑がその悲劇を物語る。

引潮に製材貯木場の巨材を交へ、轟々鳴動、原町付近に氾濫、家屋倒壊・溺死の殆は此処、（中略）全犠牲者六十余の大半分は、暗夜情況不明、避難後れた為の溺死、津浪は前から押寄せる通念と異り、正面海辺は平常、北が安全と逃れた人が、以外、多ノ郷よりの浪

に呑まれた



津波に襲われた後の須崎町原町＝須崎市提供

地震発生15分程で来襲しだした津波は、須崎湾の最奥部まで侵入かつ上陸したあと、反転して貯木場の巨材など巻き込みながら逆流した。その陸地部の流れが、平地の少ない線路沿いから須崎駅のある原町へ開けたため、勢いを保つて街区を襲った。死者・行方不明者の大半は夜間も手伝つて状況が把握できず、北西の城山へ逃げようとして呑み込まれたのである。原町の海拔は3、4メートルだ。

愛児を失つた橋田美寿子さんは、城山公園へ登れば安全と逃れる中途、意外や、その北の方角からの激流に呑まれた、と『南海大震災誌』で語つている。

## 9—昭和地震⑧ 須崎（その2）

### 発生前夜 枯れた井戸

東大が後日に計測した平均水面上の津波の高さは、須崎港内では箕越が最も高くて4・93メートル、須崎湾の東にならぶ野見湾では計測地すべてが5メートルを超えている。

紀伊半島沖を震央に発生した津波は須崎湾へ押し寄せ、力は東側へ海のつづく野見湾と須崎港内へ転じた。野見湾は湾内がリアス式であるうえ、勢井沖など水深わずか10メートル以内の海域が広く、須崎港内は入り口となる新庄沖が同様に浅く、港内は変形V字の地形になっていた。

津波は一般に、海岸近くの等深線を浅くするほど高くなり、そして湾・港内を狭くするほど高くなる。巨大な津波が押し寄せた両地は、出入りの複雑さ、浅い水深、港の狭まりでそのエネルギーを受け入れざるを得なくなっていた。

野見は地震の前夜、海岸に大干潟を生じて井戸水が枯れてしまつたという。当日、大小6度の津波によつて流失・破壊された家屋は9割近く、被害を免れた家は20数軒にすぎなかつた。経験を生かし、津波が来るまでの15分内に裏山へ逃げたのは、不幸中の幸いだつたといえる。

多ノ郷村の平野部である大間・土崎・押岡一帯は、須崎港内へ寄せた大津波が上陸した。江戸時代、土佐藩の家老桐間氏によつて干拓された桐間新田の地名も残る多ノ郷は、かつて海拔0メートル近いといえる田地が多かつた。

そこを中心とした浸水域はその後の高潮も手伝つて一時、山すそまで達し、240ヘクタールの田地を見渡す限りの海原とした。国鉄多ノ郷駅と鉄路が、海に浮くかのごとき光景を呈したのである。

大波は船をレールに乗せ、道路・堤防を崩壊した。寄せた波が逆流して須崎の悲劇を招いたのは既述の通りだ。

須崎町と、野見を含めた多ノ郷村は、共に1メートル前後の地盤沈下があつたということも、忘れてはなるまい。



須崎八幡宮に立つ追悼碑。須崎、多ノ郷一帯の被害が記されている（須崎市で）

# 10—昭和地震⑨ 黒潮町

## 家屋倒壊 砂地に集中

潮岬沖を震源とする昭和地震の津波は、海を東側にした、室戸岬より北の海岸線と県西部の海岸線が、力を真正面から受け止めた。東洋町甲浦・四十町興津浦・黒潮町佐賀・同上川口・同入野らが、なべて4、5メートル前後の最高値を示したのはこのためだつた。

甲浦では数百軒が軒端近くまで浸かるなどの被害を出したが、ここでは紙数上、黒潮町に絞つて地震の被害と併せみてみよう。

佐賀港のある鹿島が浦は、水深7メートル程と浅い上、湾形が鉢形ということで波を高くした。津波は湾に流れ込んでいる伊与木川を3キロ程遡行したといい、河口近くの街区と田畠のほとんどを襲つた。防波堤や道路の決壊に加え、家屋も35軒が倒壊するなど、決して被害軽微とはいえないなかつたが、それでも甲浦のような大規模な床上浸水、後述する中村町のようない凄まじい家屋倒壊はなかつた。

上川口には5度の津波が襲い、4度目が最高値4・5メートルだつたという。しかし浸水家屋の報告はなされておらず、被害はむしろ、上川口を含む旧白田川村の倒壊79軒・半壊360軒（中村警察署公表）に及んだ地震の衝撃にあつた。



上川口から見た入野松原。手前に吹上川、奥に蠣瀬川の河口がある（黒潮町で）

東大地震研究所発表によると、旧白田川村と、入野を中心地とする旧大方町は、住家倒壊指數5～20の被害だった。旧佐賀町は、住家倒壊指數かつたようで、これは蟻川の河口に位置する上川口の一部と、吹上川と蠣瀬川の沖積地の間にある入野付近の地盤が軟弱なためだった。

旧大方町の、倒壊375軒、半壊800軒（同署公表）の多くはこの地、特に砂地に建つ万行に集中した。体験した西地沙津子さん（79）は当時9歳。「周辺の家々がどこもかしこも倒れる中、とにかく山の方へ逃げました」とラツキヨウタケで話す。

同町の浸水は60軒。南部の漁村集落である田野浦の低地域が多かつたようだ。

黒潮町の主管課は、この旧大方町の倒壊と浸水地域をしつかり認識しておく必要がある。

## 11—昭和地震⑩ 中村町（その1）

### 泥土の地盤 振動にもろく

旧大方町の軟弱地盤でみられた家屋倒壊は、西隣に接する旧中村町（現四十市中村町）が最も激しかつた。

大河である四十川が太平洋に流れ込むあたりは、地質学的に隆起した海岸段丘とされている。筆者の故郷に近い、現黒潮町出口あたりの第四紀更新世の段丘堆積物から、よく貝化石がとれるのはその証左だ。

そして旧中村町は、四十川と支流後川が合流する直前の地にあり、両川に挟まれて繰り返し氾濫に見舞われながら、いわば輪中のよう市街を形づくりていてる。

その中村町は地質学からみれば、極めて厚い沖積層で成り立っている。地表から岩盤までが非常に深く、中央部では50メートルでも届かない。実際、中村右山のショッピングセンター建築設計に従事した、一級建築士山崎俊一氏（70）に聞いても、アトランダムにボーリングした結果平均が50メートル近くだったという。

これは、長い年月をかけ、四十川が内陸から海に至る間の丘陵また海岸段丘を浸食したためだつたといえる。しかも川の水量の多さが力強い浸食を示し、ごく深い峡谷を造つていつ



南上空から見た中村市街地。(左から) 中筋川、四万十川、後川の3本の川が流れる  
=四万十市地震防災課提供

た。中村は山にほど近いところでも地盤が深いといわれる所以である。

この峡谷を埋めたのがすなわち沖積層だが、その堆積物の主体が泥土だった。

後川と反対に四万十川の西方から合流する中筋川は、かつては合流地点が後川より上流にあつた。合流地点の河床が中筋川の河床よりも高く、しかも中筋川自体は勾配がほとんどない。中筋川は常に滯水し、洪水時には常に氾濫逆流し、川筋は常に泥土に埋まっていた。

この中筋川に象徴される泥土が、中村の分厚い沖積層を形成し、振動にもりい中村の地盤を造った。これが、震央から遠く離れた地にありながら、悲惨な県下最大の被害を招いた原因だつたのである。

## 12—昭和地震⑪ 中村町（その2）

### 家屋倒壊 嶺多の過半数

「外へはい出して、見て驚きました。自分の背よりも低く屋根が横たわっていました」

（『南海大震災誌』）

震災1年後の中村町国民学校児童の一文だ。暗闇から脱出したときの外の変わりように、驚愕したのである。

当時の中村町の住家家屋2272軒。うち1621軒が全壊した。これは、半壊を計算に入れた倒壊指数87となり、さらに非住家を加えた東大地震研究所の86とほとんど変わらない。このときの県下の家屋倒壊4834軒、内、嶺多地方が2739軒だった。中村町がその過半を占める59パーセントにのぼっていた。

南端にあつた町役場を中心に、北となる当時の愛宕町・本町・上町・北上町・中丁・紺屋町、東になる南京町のほとんどすべての家が倒壊した。残つた山側の数町も全く倒壊から免れることはなかつた。中村は全滅といつてよかつた。ために連絡が取れず、時の西村直己知事は翌日午後まで「幡多は軽微」と信じていたのである。

中村町を襲つた地震は今の震度階級でいえば、6強から7、つまり烈震か激震だつたので

はないかと思われる。



地震で家屋が倒壊した中村の市街。現在の中村一条通付近  
(四万十市立図書館蔵)

二階家は自重で2階だけが地上に残り、しかも不同沈下とあって傾いた建物が多い。にもかかわらず屋根瓦はきれいに残っているなど、軟弱地盤であることを見事にさらけ出した。家のまわりが泥土で溢れた所があつたのもその故だろう。同研究所は、四万十川鉄橋8トラス橋のうち、6橋梁が落ちたのも、やはり地盤の影響ではと推定している。

今、激しい倒壊のあつた旧紺屋町に住む田頭昭輔さん（80）は、その頃中村の市街が見える敷地の中山間にいた。地震が起きて夜が明けるや町へ走り出、爆撃の跡の様な惨状を目にする。家々は完全に潰れ、まだ火の手が残る各所から上の煙の多さがむしろ目についた。

実は、中村の一層の悲劇は大火災の発生にあつた。

## 13—昭和地震⑫ 中村町（その3）

### 消火難航 163軒焼失

昭和地震のとき、県下で200軒近くが焼亡している。もつとも小筑紫村と須崎町の10軒前後以外はごく散発的で、のこりすべてが中村町の大火灾によるものだつた。

燃え上がつたのは倒壊した内の本町と中丁。今の中村本町3丁目と同京町3丁目で、一条神社の北になる中心部だ。直ちに中村町警防団の消防車2台の出動が準備されたが、家屋倒壊で走れない。堤防沿いに着いたら消防用水の水が出ないなど、消火は困難を極めて100軒余りを燃え尽くした。

灼熱の猛火の中、男子と祖母が抱き合つて死んだ模様をつたえる、児童の文を載せた『南海大震災誌』は、更に次女を失つた今岡健さんの文を紹介する。中に次の二節がある。

一番むごかつたのは本町全焼の際、農林学校の生徒が足だけを敷かれた為に身体は自由でありながら、みすく生きた身を焼け死なせたことであつた。足を切つてくれと叫んだが、まさか生きた足を切る人もない。

この生徒も、先の男子も祖母も、水一口を与えられて焼け死んだのである。  
焼野原となつた中村では7つの棺を出した家まであり、土葬のできぬ150の遺体はほと



昭和南海地震発生後の中村町。現在の中村新町5丁目付近=四万十市立図書館蔵

んどその身のまま四万十川の河原で火葬に付される。当時、中村は町長も県幡多支庁長も出張でおらず、行政機関の長として対応できたのは警察署長だけだった。かくて中村町は次の被害を出した。

死者 273

負傷者 1034

家屋倒壊 1621

家屋半壊 696

家屋焼失 163

被災者 6443

遅くまで宿題の足袋

縫ひて寝し

その夜地震で死ぬと思はむや

(今岡健)

中村町は昭和25年、為松公園に警鐘の碑を建てた。

## 14—昭和地震⑬ 唐船島

### 岬が隆起 港は機能不全

昭和南海地震は、大陸側プレートの海上先端部である室戸岬と足摺半島の隆起をもたらした。そのときの隆起量、室戸岬が1・2メートル、足摺岬が1メートルとされており、第五管区海上保安本部がまとめた水準標の調査によると、室戸岬と清水、そしてそれらの少し北で次の数値（センチ）が示されている。

佐喜ノ浜（室戸市） +53

室戸岬東（同）

+96

上川口（黒潮町）

+0

清水大浦鼻（土佐清水市） +40

両岬に近いほど隆起量が大きく、上川口あたりが沈下との境界だつたとわかる。

地震発生直後、県は震源に近い室戸の大被害を想定して救援隊を送つたが、隆起にともなう船舶出入の障害と、津呂の地割れ・堤防決壊の外、家屋の倒壊を多少みる程度に止まつた。

その点、現土佐清水市はもう少し被害が大きかつた。

清水警察署は死者7名、家屋倒壊165軒、同浸水200軒を公表しており、倒壊は清水・

下ノ加江・三崎・下川口の各方面まんべんなく、浸水は下ノ加江方面に集中していた。



隆起が確認できる唐船島。満潮時には左に見える平らな部分まで海水につかる  
(土佐清水市で)

おそらく各地とも強震程度の揺れはあつただろうし、湾が東に開いた下ノ加江には津波が直撃する。海水が港の家々を浸水し、そして下ノ加江川を遡行した。下ノ加江・以布利・清水など、すべての港が隆起によって船の出入りに支障を来たしたにかかわらず、多少の津波被害は免れなかつたのだ。

清水港の最奥部に、「唐船島」と呼ばれる島がある。昭和地震によつて80センチ隆起したことが目視できる島で、故沢村武雄高知大学教授らの努力によつて国指定天然記念物となつた。

足摺半島また室戸方面の住人は、地震発生のさいは通常の倒壊と津波に加え、隆起にともなう地割れ、港の機能不全をも考えておかねばならぬだろう。

## 15—安政地震① 概要

### 前日の東海地震と連動

昭和南海地震を遡ること92年前、安政元年（1854）11月5日に安政南海地震が起きた。震央は昭和地震よりやや西の、東経135度、北緯33度と推定されている。室戸岬と潮岬の中間、紀伊水道沖に位置するわけだ。

その前日、11月4日には遠州浜松沖を震央と推定する東海地震が起きていた。同じプロトに属する両地方の1日早い地震だつたということは、つまり連動を必然とする南海トラフ巨大地震だつたということになる。

地震の規模を示すマグニチュードは、両地震とも8・4。昭和地震よりはるかに大きいエネルギーで、波高の高い津波が発生したことも手伝つて一層大きな被害をもたらした。

ちなみに同年6月には畿内を中心いて、翌2年10月には江戸を中心に大地震が起きていた。前者では、後に明治天皇となる皇子が庭の畠に避難し、後者では、小石川の水戸藩邸にいた志士藤田東湖が圧死したことでも知られる。しかしこのふたつの地震は直下型地震で、南海地震とは直接つながらない。

さて、11月の大地震に見舞われた土佐藩は、領民の家屋焼失、海防設備の損失などを理由



安政元年の津波襲来を記す仁井田神社の玉垣碑  
(高知市仁井田で)

に藩主の帰国を願い出た。海防とは、幕末の西洋列強の圧力に備える大砲などの整備を指すが、ここでは触れない。

そして土佐藩は12月、集計された領内の被害実態を幕府老中へ報告した。内、庶民の住む町郡部の主な項目を摘記すれば次の通りである。

市郷家数	焼失	流失	潰家	半潰	死人	亡所	4方村	372人
	2460棟	3182棟	2939棟	8888棟				

これには武家屋敷などは含まれない。各地の詳細はいかがであつたろう。

## 16—安政地震② 高知城下（その1）

### 郭中・町家も被害大きく

安政地震は、高知城の9つの矢倉、3つの多聞を大破した。天守や堀などに傷みが出たのはもとよりで、城を囲む武家街にも相応の被害が生じた筈だ。もつとも、藩主が届け出た侍屋敷の被害数は総合計のため、城下に限るとわからない。

山内氏は土佐入国後、南北を鏡川と江ノ口川、東西を堀詰と升形で区切り武家の居住区とした。郭中かくちゆうと呼ばれた区域で、大方が造成地のここは城山よりも揺れが激しかつたろう。

その郭中の東西となる町人の居住区については、次の被害件数が出ている。

焼失 1676棟

潰家 568棟

焼死 1人

過死 105人

行方知れず 4人

「三災録」という記録によると、4日は大したことなかった。しかし5日16時過ぎは「ためしもなき大地震、前後おぼへず、家々将基倒」しとなり、貴賤を問わず親子ぢりぢりに逃

げまどつた。

新市町（現はりまや町2丁目）の一画には被害が集中した。道具屋の7人、古着屋の6人、

酒屋の4人、薬屋2軒の9人が、全壊した家で即死。その四辻だけで26人が死んだ。

第3回で述べたように、今の高知市街は浦戸湾へ近くなるほど沖積層を深くする。郭中を基準にすれば、その振幅は大まかにいつて西の町人町より大きく、東の町人町より小さかつただろう。

宇佐の住職の日記では、「御国城下大地震、郭中・町家共過半潰れ込む」とある。東西の違いがわからず、これは、長宗我部氏によつて高知城の周りが固められ、堀詰より東は山内氏になつてから干拓され、その潮田を市街に築き立てていつた、という「三災録」の説明が合理的だ。筆者は新市町よりさらに東の新町（現桜井町）に住み、元潮田のその地の軟弱さをよく理解していくのだ。



安政地震が記録されている「三災録」(高知市立市民図書館蔵)

# 17—安政地震③ 高知城下（その2）

## 津波の高さ物語る碑

安政地震では津波が発生し、浦戸湾口部の桂浜村と、長浜川河口部にある長浜村の藻洲<sup>もず</sup><sub>かた</sub>が消失した。地形上、ともに津波が直撃する位置にあるためだつた。

その中間にある浦戸村の内湾側は直撃をやや免れたかたちだが、それでも被害なしではすまない。山際まで寄せた波は家々の床上1・5メートルまで浸し、岸にあつた分一（関税）役所はいちどに流された。

桂浜と浦戸の境になる稻荷神社に、大黒屋嘉七郎が建てた警鐘の碑がある。

**安政元寅十一月五日大地しん・津波、後世人、大地しん有時、津浪入と心得へし**

これは倒壊した鳥居を、大黒屋がもらい受けて刻銘し据え付けたものである。同社本殿は小山の頂にあり、鳥居は登り口との中間にあつた。今は道路開削のため坂を掘り下げて、碑も元の位置ではなくなつたが、津浪のおよその見当はつく。

神社の麓となる越所<sup>こえと</sup>、すなわち境峠は、もともと海拔6メートル程だった。桂浜からの津波はこの越所を越えなかつたといい、浦戸の床上1・5メートルの浸水からしても得心できる。浦戸が4メートル、桂浜が5メートル程の津波ではなかつたか。

桂浜の人々は皆、山へ逃げ登り、流死1人にとどまつたのは不幸中の幸いといえよう。

現高知市では、浦戸湾口東側の種崎・仁井田両村も襲われている。仁井田の北山麓にある仁井田神社の玉垣に記録があつて、4日は「すゝなみ」(鈴浪)だった津波が、5日の大地震後は「大潮」となつて襲来した。前月末より潮が狂つており、そんなときは油断するなど警

告している。

桂浜と浦戸の境にある稻荷神社の警鐘碑 (高知市浦戸で)

浦戸湾口の被害は、前回に述べた城下町の件数には含まれない。桂浜村以下5村とも吾川郡か長岡郡に属していたためで、これは同じ「三災録」の土佐郡をも合わせた3郡合計の中に含まれる。人家では「潮入家」88軒、「流失家」102軒があるのがそれだが、内訳は不明だ。

## 18—安政地震④ 高知城下（その3）

### 地盤沈下 浸水に拍車

安政の津波は昭和の津波よりも高かつた。城下町や城下の村々に大きな影響を及ぼさずにはおかなかつた。

津波は、満潮とからんで3度の進退があつた4日の翌日、本震によつて浦戸湾から市中へ上がつてゐる。

浦戸より内、地潮より三尺四、五寸高かりし

（「三災録」）

1メートルばかりの津波だ。これが潮田との境になる城下東端の地域、農人町と潮江村を襲つた。鏡川河口部の北と南にあたる所だ。

そして翌6日。今度は午後2時過ぎに下知の堤しもじが決壊した。打ち続く余震で壊され、昼前の満潮の影響もあつただろう。海水はまず下知の新田村へ流れ込み、次いで西につらなる新町一帯を浸していった。

新町・下知は床上浸水となり、低いところは30センチ以上の高さまで来る。全体に海のようになり、満潮時には徒步で出られなくなつた。床下まで含めるなら、今の天神橋通りまで



「高知下町浦戸湾風俗絵巻」に描かれた下知の堤。

上に見えるのは葛島（高知市立市民図書館蔵）

潮が来ている。郭中も、大手筋北会所（現土佐女子中高）より北東の地域が高潮で溢れたわけだ。

城下は以後、海水が一進一退する中で、往来に船を用いねばならぬ町が多くなる。半年過ぎても雨が降れば、すぐ床上あるいは床下が浸水したのだ。下知の家々などは床上150～180センチにさえ達した。これは、津波に加え、やはり地震による地盤沈下があつたと考えねばならぬ。

目を広げると、浦戸湾東側の葛島・高須の村落が軒まで浸かり、介良・大津も氾濫している。絶海・葛島・田辺島らの堤決壊が直接の要因だが、潮水に浸かつたのは南の潮江、北の薊野・一宮らの広い田地も同じだった。城下町を囲む四方の村々は、皆、津波と沈下の両方の影響を受けていたのである。

それでも「三災録」は記す。

今度の高潮に女童等驚かれとも、宝永に比すれば至而低し

## 19—安政地震⑤ 高知城下（その4）

### 高知の繁華街 丸焼けに

安政地震は城下に火災を発生させ、2千余棟を焼失した。郭中の武家街に火事はなかつたから、すべて郭中をとりまく、町人と、足軽ら下級士の住む下町したまちだつた。土佐藩全体での焼失は、民家2460棟に武家屋敷12棟を加えた数だから、80パーセントを超える焼失が城下に集中していくことになる。

火事が起きたのは大地震のあつた5日16時過ぎ。時をおかずには各地から火の手があがり、火元は数えようもない。何十人も焼け死んだなどとうわざが流れるなか、火は6日になつていつそう勢いを増した。播磨屋橋など市中の重要な連絡橋が焼け落ち、人々は打ち続く余震・高潮との三重苦のなかで逃げまどつた。

落ちた橋は播磨屋橋のほか、幡多倉橋・菜園場橋・材木町橋2カ所・新市町橋という、今のかみの菜園場あたりに集中した5橋。ために付近の堀川に係留していた、種崎町と菜園場町所属の屋形船・平田舟ら95艘がいっせいに焼けた。

この播磨屋橋と菜園場周辺は、郭中の東になる庶民の町すなわち下町したまちきつての商家街だつた。というより、郭中西側の上町かみまちと比べても商家が多く、いわば高知経済の動脈といえると

ころだつた。

そこが丸焼けになつた。6日をピークとした火は7日になつてようやく鎮火へ向かつたものの、繁華街が灰燼に帰したとあつて、城下内外への影響は甚大だつただろう。つまり、下町で焼け残つたのはざつと見通して、鏡川の北側に沿つた2、3の街区と、江



「安政元年土佐震災図絵」の火災図（佐川町教委蔵）

ノ口川南沿いの鉄砲町・山田町、堀川沿いの農人町ら、ごく限られた面積だつた。これは思うに、川に近いことから大規模な延焼を免れただけではないか。

おわかりのように、同じ町人町でも上町に大火はなかつた。三災に遭遇した下町どちがい、上町は地盤が比較的しつかりしている。地震も、津波も、火災も、いずれも大過なかつたのだ。

# 20—安政地震⑥ 高知城下（その5）

## 5年に及ぶ余震記録

地震で破壊し、猛火で焼失した城下豪商のひとつに、菜園場の木屋があつた。家は橋のすぐ近くにあり、当主の竹村与右衛門は「菜橋」と号した。その家に残されてきた史料に「地震日記」がある。

11月4日に始まる日記は5日の状況こそ詳しいものの、他は大中小に3分類した地震の回数ばかりである。

実は、郭中の鏡川に近い水門（現鷹匠町2丁目）に番人がいて、回数はその者が記録したものとの写しらしい。安政元・2年こそ知られているが、この日記は5年末まである。価値が認められ、当時の高知大学理学部岡野健之助教授らの論文に生かされた。

日々の記録は、月計また年間合計でまとめられている。合わない数字もあるが、元・2年は月計と年間合計、3～5年は年間合計のみを紹介する。

元年

11月	大震7	中震44	小震196	計247
計	大震10	中震64	小震272	計343
12月	大震3	中震20	小震76	計96



「地震日記」の冒頭部分  
(高知県立歴史民俗資料館蔵)

2年	正月	3月	5月	7月	9月	11月
大震						
1						
中震						
2	6	2	6	30	21	18
小震						
31	42	42	48	30	21	107
計	計	計	計	計	計	計
18	23	36	48	34	48	115

2月	4月	6月	8月	10月	12月	3年計	4年計	5年計
大震	大震	大震	大震	大震	大震	2	2	大震
1								
中震	中震	中震	中震	中震	中震	1	4	中震
1								
小震	小震	小震	小震	小震	小震	19	41	小震
32	19	28	13	183	85	479	48	56
計	計	計	計	計	計	61	91	63

余震が徐々に弱まっているのがよくわかる。  
番人の体感か、何か道具を用いていたのか、興味深い。

## 21—安政地震⑦ 岸本

### 潮田に海水 船は陸に

安政地震は、土佐全土に被害をもたらした。東部に目を転じ、まず香美郡をみてみよう。長岡郡十市村から香美郡久枝村（共に現南国市）、同赤岡村、岸本村、手結村（共に現香南市）などと続く、ほぼ直線の海岸部は、大なり小なり地震に加える津波の襲来を受けた。

うち岸本村は、「大変記」という記録に詳しい。4日、海岸に仕掛けている地曳網が3度ほど沖へ引っ張られる。不思議がりながらも、「鯨でも沖廻ししているかのう」と笑つてすませた。

ところが快晴の5日午後4時過ぎ、一転、大地震が起きた。大地が動き、煙が立ちのぼり、砂が、水が、吹き上がる。液状化現象だ。枝村の新在家、新町と呼ばれた今の岸本西側の集落は、草葺よりも瓦葺の家が倒壊した。時をおかず寄せた津波に追われ、転び、つまずきながら、皆が北の若一王子宮への八丁道を逃げた。

その津波ははるか沖合に、低い陸地側よりも高くなつて現れた。「大変記」はその模様を、「緩に、水浪之打如く、ハタリく」と寄せたと記す。1番、2番と続く波の引き潮は矢のように速く、多くの船が沖へ引き出されて木の葉のように漂つた。

波は5番目が最も勢いがあった。総じて岸本村の北側に展開する潮田は、月見山の西裾から流入した海水で浸かり、また浦の漁船は多くが陸に打ち上げられたという。

しかし、岸本本村での被害は少なかつたらしく、一村の家屋被害は流失11棟、潰家数棟にとどまつた。道沿いにある飛鳥神社に、安政5年（1858）国学者のしたためた警鐘の碑

が建つ。「諺に油断大敵」から始まる文は地震・津波の襲来を述べたあと、記す。

此地は神祇の加護によりて一人の怪我もなくとはいえ宝永4年（1707）を忘れてはならず、警戒を怠らぬよう結ぶのである。



飛鳥神社に立つ安政地震の碑（香南市）

## 22—安政地震⑧ 夜須・手結

### 堤が決壊 蔵ごと流失

岸本村の東に夜須村、その東に手結村があつた。共に香美郡で、今は香南市となつてゐる。仁井田方面からほぼ直線状に延びる海岸線は、この夜須・手結で大きく湾曲し、その分、津波のエネルギーを受けやすい。しかも夜須の中心集落は海拔4、5メートルしかなく、これは岸本中心部より2メートル程低かつた。

4日。夜須の磯では潮の満ち干が激しく、海底が現れたり沈んだり。それだけでなく普段に比べて不規則で、皆「不思議、不思議」とは言うものの、残念ながら恐れるわけではなかつた。翌日、襲つた地震・津波の被害は、岸本のそれをはるかに超えた。

夜須町 約160棟流失 残り約40棟

同千切 4棟流失

手結浦 153棟流失 半潰多数

夜須町屋では死者が7人出た。同地の被害は堤の決壊が大きく、1番波の襲来した5日の日の入り以後を、同地の警鐘の碑が記す。

同日入頃一番波打入り、当西町より東へ打流し、諸人は又驚、有合ひ之食物着用、手毎に

引掛け、此山上へ持運、数百人相助り、實に当山は命山と冰賞致す也

人命の多くは助かつたが、家屋は藏もろとも最も最大な3番波で押し流され、跡は白浜になつたという。ちなみに碑は中心部より西北の小山、坪井・觀音山にある。周辺より20メートル以上高い。

結局、岸本村・夜須村・手結村を含む、「三災録」に集計された香美郡の家屋と人的な被害は、次の通りだつた。

流失家	456棟
潰家	148棟
半潰家	460棟
死者	18人
行方不明	2人

香美郡の家屋流失は、70パーセントが夜須・手結両村で占めていたのである。



夜須（香南市）の警鐘碑。「家に帰るな」と結ぶ

## 23—安政地震⑨ 甲浦・野根

### 船流失 おびただしく

安芸郡最東部での被害は、これまでの地域とやや状況が違つた。

昭和地震で1・2メートル隆起したとされる室戸岬の近くは、安政地震でも次のような変動があつた。

津呂・室津之両湊に限り、大変以後卯九月迄三、四尺地形高く成り候て、大船入れざる処、  
九月末頃に至り余程汐増に成り、三百石積位之船、湊え入由

津呂と室津、すなわち現室戸市室戸岬町と室津という、室戸岬からおよそ2キロないし6キロ高知寄りとなるこの港で、90センチから120センチが地震のため隆起した。その状態が翌年の安政2年9月まで、つまり10カ月間ほど続き、9月末になつてようやく大船の入港ができるようになつたという。隆起は4、5尺との史料もあって、これは室戸岬の隆起が、昭和地震よりずっと大きかつた可能性を示している。

ところが、この岬を回つて海岸沿いに30数キロ北上した所。阿波国との境に近い野根村・甲浦村（共に現東洋町）では、このような隆起の被害はあまり聞かれなかつた。

かわつて、地震・津波にともなう多くの死者、家屋倒壊が出、甲浦だけで、少ない数字で

も次の通り記録された。



複雑な入り江の甲浦（東洋町提供）

居宅	48棟	漬家
同	7棟	半漬
同	32棟	流失
男女	8人	死亡
同	30人	行方不明
市艇	11艘	など船の流失もおびただしく、漁民

の受けた打撃は大きかつた。

南へ一山越えた野根村では、11月5日の夜8時頃と11時頃の揺れが最も大きかつた。「津波が入るぞ!」との大声で、村人は北山の方角にいる観音寺の畠へ集まり、あるいは浦分にある来迎寺・永徳寺の畠など持ち出して野宿する。

その村の、浦分家数252棟。うち25棟が全壊し、105棟が大破となつた。死者こそいないようだが、決して少ない被害ではなかつたのである。

## 24—安政地震⑩ 宇佐

### 橋落ち波から逃げ切れず

西部はどうだつたろう。高岡郡の宇佐（現土佐市宇佐町）は昭和地震のとき、安政地震の経験を生かして最少の人的被害にとどめた。

その安政地震は、「三災録」によると、宇佐浦、渭ノ浜浦、福島浦の宇佐3浦で次のような被害を出している。

1060棟	流失
17棟	大破
44人	行方不明
14人	死亡
12棟	潰家

死者・行方不明者は3浦とも似かよつた数で、そなつた理由はそれぞれにあつた。

宇佐では11月4日の鈴浪に続き、5日の午後5時頃、一天薄暗くなるや未曾有の大地震が起きた。人家は無惨に崩れ、大地は破裂し、人々は逃げ走ることもむつかしい。間もなく沖から山のような波が押し寄せ、3浦の集落はたちまち一面の海となる。月の入りまでに襲つた津波8、9波。「汐は進むは緩く、退くは急也」（「地震日記」）、3番までの引き潮でほとんどの家が流失した。

地域別では西の福島浦が30棟ほどしか残さず、死者は皆、津波に呑まれた。山へ逃れるには橋を渡らねばならず、これがすべて落ちたためにただ東へと走り、2波3波と来る波に呑まれた。渭ノ浜は山際まで波が寄せ、宇佐も残った家は60棟ばかり。波は、地震日記を残した小高い地にある真覚寺の本堂下まで来ており、宇佐は全体、津波の弱いところでも床上90センチ、強いところは二階家の2階まで来たのである。



土佐市宇佐町の菩提供養塔

潮の入らなかつた家は山上の1軒のみ。山へ逃げ登つた者は助かり、船に乗ろうとする者の多くが溺死したという、この津波。宇佐の死者70余人だつたと刻む安政4年（1857）の菩提の碑は、こうも述べている。

宇佐の地勢は前高く後低く、東は岩崎、西は福島の低みより、汐先述路を取巻、（中略）用意なくとも早く山の平らなる、傍に岩なき所を択ひて逃よかし

## 25—安政地震⑪ 須崎

### 海に向かい犠牲も

今の須崎市域でも大きな被害が出た。

太平洋に直面した久通、野見湾に面した大谷・野見らの民家70余棟が流失し、新莊川下流の下分村でも45棟が流れている。野見は海拔5メートルにある江雲寺の庭まで津波が襲い、ほぼ同様の力が須崎湾に直面する新莊川をさかのぼったのである。

昭和地震で悲劇を生んだ須崎は、安政地震でも悔恨をもたらす惨状を招いた。須崎村・浦に集中してみてみよう。

11月4日朝、地震が起きて津波が襲い、午後になつて原町および古倉町（現原町2丁目）へと潮が上がり、釣町の住吉宮（現新町内）近くの家の庭では45センチに達した。人々は古城山下の発生寺で夜を明かし、5日に帰つたところで16時頃、今度は大地震が起きた。間をおかず津波が入り、夜具など持つて北の古城山、あるいは西の山にある大善寺や金刀比羅宮へと逃げ登つた。

7度とも9度ともいわれた波は3番目が最も大きく、潮先は山際となる発生寺の門前まで来た。目を広く転すれば、多ノ郷・土崎・吾井郷・押岡・神田の周辺諸村で多数の家が流れ

たり壊れたり。かくて須崎村・浦だけで次の被害が出た。

281棟

36棟

潰家

死亡

34人 行方不明



大善寺から見える須崎湾口

死者は皆、浦人で、意外にや津波が来るのを承知の上で海に向かつたためだつた。

直ぐに浜へ走り出で、船にのり、其の難を遁れんとせしに、浪高くしてのる事も出来がたく、兎や角する内、船と船との間にて擗りきられ、五体半分に相成り、死せしものおおき趣

(「真覚寺日記」)

安政地震での高岡郡の死者・行方不明者は、110人前後だった。つまりそのほとんどが、宇佐と須崎の被害者だったのである。

## 26—安政地震⑫ 幡多沿岸

### 猛威伝える巨大な碑

幡多郡沿岸も地震後の津波に襲われた。佐賀・伊田・上川口・入野周辺・田ノ浦・下田・下茅・以布利・清水・当麻・古間目・安満地・小筑紫七浦・宿毛など、現黒潮町・四十市・土佐清水市・大月町・宿毛市各沿岸集落の多くが、一度に流亡<sup>しゆりやう</sup>、あるいは大浸水に見舞われた。

天神の森南方に中嶋と云ふあり、此付近の人家は海嘯の為一戸も残りなく浚<sup>さら</sup>へられて、北西方の田の中へ押流さる、又、中嶋海浜に曳き上げありし漁船の中の一隻は、天神の森にありし馬目木（水面より一丈斗りの高さ）に懸りたり

〔補註幡南探古録〕

浦の南半が流失した以布利である。浜にあつた船が、高さ3メートルほどの木に掛つたのである。

深い入り海になつたところ、また遠浅は潮高く、伊田・下茅・小間目などの浦は一軒残らず流され、瓦家は潰れやすく茅家は潰れがたし、商家の多い下田浦では壊家が目立つた。

筆者が中学時代を過ごした黒潮町入野松原に、縦横2メートル近い巨大な震災記念碑がある。入野浜の町・同本村・早崎・下田ノ口諸村をいつきに押し流した津波を活写するもので、

吹上川と蛎瀬川に溢れた7度の波が猛威を振るい、最大4番の波によつて流れた家は数知れない。たちまち一帯が海となり、退くや砂漠と化した姿を、3年後の安政4年（1857）に伝えている。

ただ、足摺半島は昭和地震と同様、津波の被害がほとんどなかつた。半島の南北根っこにあたる清水の浸水と以布利の流失はあるても、それより東の半島部は揺れが小さくて大過なかつた。そして昭和地震よりもさらに大きな隆起があつた。



黒潮町・入野松原に建つ安政地震の碑

窪津浦より大谷・伊佐・松尾・中浜辺迄は、地ゆりあがりし様子、其内伊佐浦は爾来より五尺ばかり汐たらず、汐みちの時見えざる岩つからず

（同前）

1・5メートルも隆起したのである。

## 27—安政地震⑬ 中村・宿毛

### 倒壊家屋から火災続出

このとき中村では地震によつて火災が発生し、宿毛では地震・津波に加える火災の3重苦となつた。

5日午後4時の地震で中村の町家は9割方が沈下する。11、12項で述べた、この地特有の軟弱地盤のためだ。約200棟が全壊または半壊し、当時の本町・上町・本新町・中新町・紺屋町らで被害を大きくした。これは要するに、昭和地震で倒壊した区域と大きな違いがなかつたのである。

そして紺屋町以外の80棟ほどが火災で燃え上がり、30人ばかりの死者が出た。家に敷かれた人が多く、ねじれた戸が開かぬため焼死ぬ人が出る。昭和地震の再現のような残酷な別れがここでも見られた。

父、足をしかれ、其子親を助けんといろいろ致すうち、火近寄て叶わず、父子念別三四を申し別れ、やけ死する者あり

(「補註幡南探古錄」)

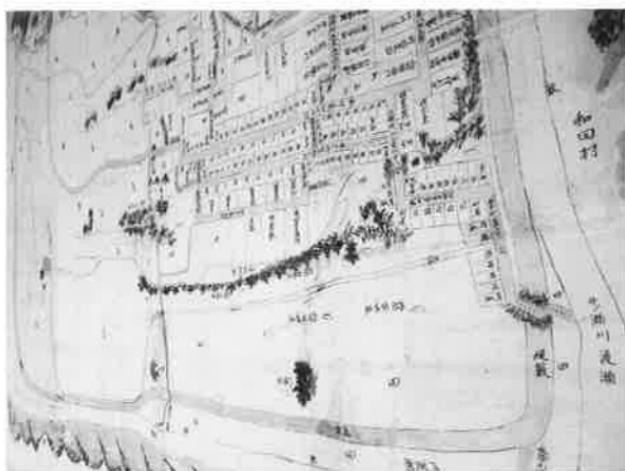
一方、宿毛は強い地震で町の大半がつぶれ、家老山内氏の住む土居の巨館が、傾いたり屋

根を大破したりした。人々は山へ逃れ、人気の少なくなつたところで、倒壊した3カ所の家から火災が発生した。松田川河口の堤を破壊あるいは越えた津波が、宿毛の町中へ入つたのはこのとき。宿毛総曲輪といわれた街区の南半分を浸水し、消火する者のいないことから火勢の拡大を招いた。

宿毛は流死者こそなかつたようだが、町家から侍屋敷へと延焼した火災は、「輕輩六人死失」(「地震記」)させ、町家でも死傷者を出した。郷分まで含めると10余名の犠牲者が出了ようだ。三災への備え、これが十分に徹底していなかつたのである。

かくて幡多郡では次の被害が集計される。

約 760 棟	潰家
760 棟	流失
約 100 棟	焼失
94 人	死者



宿毛総曲輪を囲む堤（中央の帯状の部分）（安芸歴史民俗資料館蔵）

ちなみに「三災錄」では焼失158棟となつて  
いる。

ちなみに「三災錄」では焼失158棟となつて

## 28—宝永地震① 概要

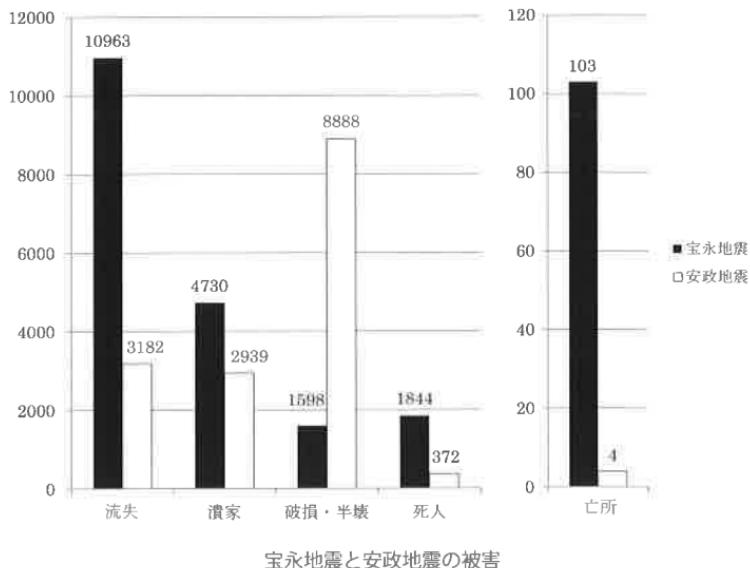
### 津波被害 土佐湾岸全域で

政府の地震調査研究推進本部は平成25年5月、次に発生する南海トラフ巨大地震の規模（マグニチュード＝M）を、8～9クラスとした。M8・4前後とした従来の考え方を改めたもので、区域も南海・東南海・東海にわたる同時発生まで想定している。

規模・区域とも安政地震を上回る大被害が予想される。じつは、ほぼこれに匹敵する巨大地震が日本史上に記録されていた。安政地震を遡ること147年前の、宝永4年（1707）の宝永地震である。同本部がM8・6と推定した規模は文献史上最大といえ、震源域は土佐沖から遠州灘沖にまで及んでいた。

推定された震央は東経135・9度、北緯33・2度。紀伊半島潮岬のすぐ沖合だつた。発生したのは「十月四日未の上刻」（『谷陵記』）。午後1時台だ。未の上刻については午刻（同0時）などといった異説もあるが、これで進める。

地震は直後、西日本海岸一帯への大規模な津波を発生させた。東は房総半島から西は九州種子島まで。被害は土佐が最も大きく、概ね10メートルを超える、地形によつては20メートル以上の津波が土佐湾岸の端から端まで襲つた。近年、高知市への被害を少しでも減らすべ



宝永地震と安政地震の被害

く、可動式防波堤の建設計画さえ検討されたと報道されたのはこのためだ。  
かくて地震と津波のダブルパンチをこうむった土佐は、安政地震を大きく上回る被害を出した。双方の数値を概ね庶民に絞つて比較すれば、グラフの通りとなる。

宝永の流失が安政の3倍以上となつていた。宝永の被害が極めて大きかつたことを示し、空前絶後といえるような亡所に直結した。

安政地震のとき、土佐の人々は宝永地震より軽いといった。その宝永地震は東に目を向ければ、49日後に富士山大噴火を招いている。宝永山の名を残すに至った宝永地震が、どれほど甚大な爪痕を土佐に残したのか。追つてみたい。

## 29—宝永地震② 高知城下（その1）

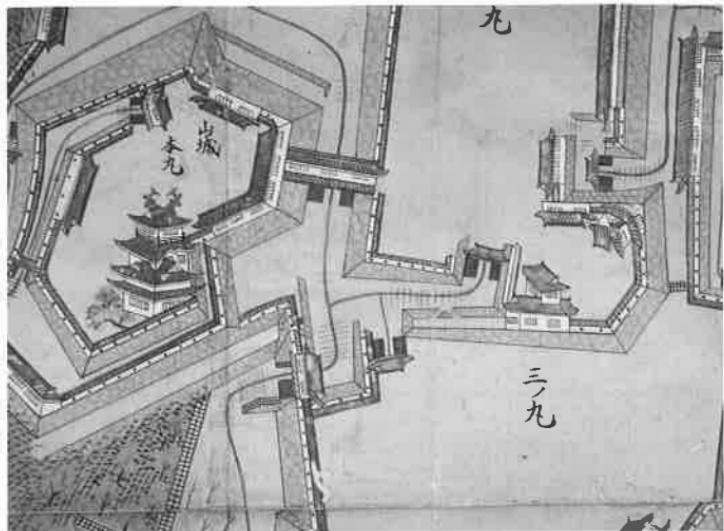
### 城の櫓門や石垣壊れる

空は晴れ渡つていた。陽曆10月28日のその日、高知城下は耐え難い酷暑に見舞われていた。昼過ぎ、静かに、ゆうゆうと揺れ始める。次第に強くなり、やがて天地が一つになるかといふほど揺れる。大地が割れ、砂が、水が噴き出し、家も咸も崩れ、井戸水は枯れる。土佐一国の被害を調査した学者・奥宮正明は、著書『谷陵記』の文頭に記す。

山穿て水を漲らし、川埋りて丘となる、國中の官舎・民屋悉く転倒す、逃んとすれども眩くらみて圧おぢに打れ、或は頓絶の者多し、又は幽岑寒谷の民は巖石の為に死傷するも若干連続する余震の前には、必ず大筒を放つたような大音がとどろき、その回数日々20回ばかり。揺れば二十余日後となる、陰曆の10月末まで止まらなかつたといふ。

土佐のシンボル高知城の天守閣本体は、堅固な地盤とあって無事だった。しかし、その天守閣をとりまく所々で崩壊がみられた。大手門脇の石垣こそ表裏の膨らみのみにとどまつたが、北ノ口にある櫓門が倒壊する。それだけでなく、同門の脇塀が壊れ、櫓下となる石垣は23メートルにわたつて崩れた。その西の堀下石垣16メートルも崩れ、二ノ丸近くの堀下石垣十数メートルはあちこちで落石がみられる。三ノ丸の石垣近くでは70メートルほどにわたつ

て地割れが生ずるなど、曲輪内の多くが損壊した。



宝永年間と見られる高知城図の本丸・二ノ丸・三ノ丸付近の堀や石垣  
(高知県立図書館蔵)

侍屋敷にも倒壊があつた。前回の図表に示した潰家4730棟は民家のみだ。武家屋敷にも107棟の全壊と93棟の半壊が出、軍船を置く船屋敷にも5棟・35棟の全・半壊が計上された。これらの数字は土佐全体だが、山内家直轄また諸老子の船屋敷の多くは浦戸湾内に集中する。武家屋敷・船屋敷とも、城下または浦戸湾での被害がほとんどだつたと思わねばならぬ、これは倒壊24棟の寺院も同様だろう。下知寺町にあつた各寺院は地震後こそぞつて移転している。この24棟にも含まれているはずだ。

## 30—宝永地震③ 高知城下（その2）

### 地盤 最大2メートル沈む

城下では堅固に建てられた家が倒壊した。地震の衝撃の強さが窺われる。このとき土佐藩が集計した民屋倒壊は4730棟で、次の内訳になつていた。

2022棟

町家

1994棟

郷

714棟

浦

町家とあるのが、高知城下の民屋ではないかと思われる。中村の町家を含むかもしけぬが、数字は大正9年刊の『高知市史』が、市内の潰家2129棟としたのに近い。当時の高知市域は、中心市街地に江ノ口村・潮江村らごく一部を加えたのみだ。町家2022はまず城下のみか大半とみてよいだろう。

してみると、現在の高知市域に広げれば、倒壊はあるいは3000棟近く、土佐全体の60パーセントを超える程だつたのではないかという、恐ろしい推測さえ浮かんでくる。

転倒した家屋からはときに火災が発生し、火の手は空を焦がす。一次災害をこうむつた一部から二次災害が発生したが、こうなる理由の一つにあるいは地盤沈下があつたか。

政府の地震調査研究推進本部は、宝永地震時ににおける高知市街地20平方キロの沈降を、最大2メートルとした。研究者によつては土佐中央部2・5メートルとする人もおり、安政及び昭和地震より大きかつたことは間違いない。

しかし、宝永地震によつて高知城下が大火災になつたとする史料は見ない。火災は限定的だつたと思われ、それよりも2~2・5メートルとみる城下の沈降を重視せねばならない。

昭和地震のとき、軟弱地盤の上にたつ中村町は、不同沈下によつて壊滅的な倒壊をもたら

された。高知城下も新市町、新

### 谷陵記



寶永四年十月四日未上刻大地震起り  
山穿チ水ヲ漲シ川埋リテ丘下川國中ノ官舎  
民屋悉ク轉倒ス處アトスニ既テ靡打レ或ハ  
頽絶ノ者多シ又ハ幽岑寒谷ノ民ハ巖石ノ爲  
死傷凡モ若干ナリ係ル後ハ高潮入ナルヨシ  
云傳フナドツブヤク所同下刻津浪打テ海  
邊ノ在家一所ドツダニ方ナシ未ノ下刻ヨリ寅

町方面などは、埋め立てによつてできた町である(16項参照)。中村に似た条件下の下町を、震度6強ないし7の激震が襲つたとすれば、概ね冒頭の数字に得心せざるをえないのではないか。

城下大被害の第一の要因は、まず埋立地を中心とした町部の

宝永地震の土佐藩の被害をまとめた「谷陵記」  
(高知県立図書館蔵)

## 31—宝永地震④ 高知城下（その3）

### 津波 大手門前まで

倒壊をしのぐさらなる被害の要因が、大津波の襲来だつた。浦戸湾に打ち寄せることが7、8度。3番波が最も大きかつた波の高さは5、6丈もあつたというから、そのまま信すれば15～18メートルとなる。『土佐大震記』が記すこの波高がどの場所だつたかが問題だが、波は西孕の山で防がれたとも書かれる。してみれば、浦戸湾口から湾内へ押し入つてきたときの波高ではないか。

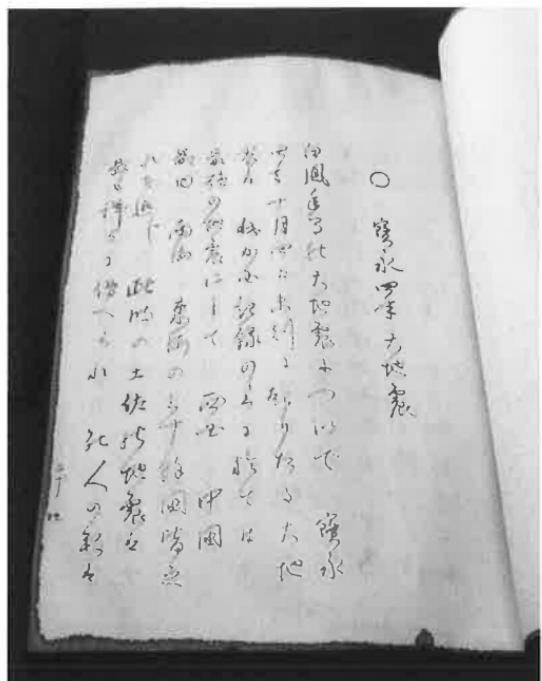
一宮・土佐神社の参道中間点に、国土地理院の水準点がある。その数字8・7メートル。津波は水準点のすぐ南に建つ、仁王門にまで達した。浦戸湾に流れ込む久万川を激しく逆流したのだ。

城下を襲つた潮は『谷陵記』によると、江ノ口川筋が常通寺橋（現上町一丁目西北隅）あたりまで。市街全体は真如寺（現天神町内）橋から北を見通す線だつたという。だがこれは不十分で、脇潮は大手門前まで寄せ、現今市域からみれば、西は井口、北は久万・万々までを水没させていた。

浦戸湾口と西孕で2度も衝撃を緩めながら、なおも津波がここまで押し込んだのにはわけ

があつた。最大2メートルに及ぶ地盤沈下だ。これにより、津波また高潮で流入した海水が、その後も引かない。

初の打入し日より定潮となり、聊も干満なし、潮江・下知・新町・江ノ口より、一宮・布師田・大津・介良・下田・衣笠まで一般の海になり、船ならては通路なし



「土佐大震記」(高知市民図書館蔵)

衣笠は現南国市域。浦戸湾東側は、北の方では現南国市常通寺島まで海の中だつた。また下知・新町は堤の決壊により、いつそう被害を大きくし、下知寺町にあつた諸寺は、なべて水没・倒壊によつて移転を余儀なくさられる。船での移動範囲は安政地震時より広かつた筈だ。

右にない薊野・比島・秦泉寺3村も逃れることはできず、田地一面あるいは集落もろとも浸かつた。

## 32—宝永地震⑤ 高知城下（その4）

### 近くに山なく逃げられず

現高知市域で最も悲惨な光景を見せたのが、当時、長岡・吾川両郡に属する浦々だつた。『谷陵記』は示す。

長岡郡	種崎	亡所
吾川郡	御畠瀬	亡所
	浦戸	亡所
	勝浦浜	亡所
甲殿		亡所

「亡所」とは住めなくなつた村落。大津波によつて、浦戸湾口部の4浦と太平洋に直面した甲殿が、一氣に多くの人家を流した。種崎の箇所には解説がある。

溺死七百余、死骸海渚に漂泊し、行客哀傷に堪へず、且臭腐忍びへからず

御畠瀬と浦戸は裏山が近いため、比較的逃れられた。種崎はその山がなく、安政とは雲泥の差の無残な姿となつたのだ。

このとき8歳だった山内家船手方の男子が、船屋敷をいつせいに流した種崎襲来時の恐怖

を、後に書き残している。

大震のあと、津波が来るということで家族皆が助け合い、兄は倒れた家から重代の刀を持ち出す。そして仁井田の山めがけて走ること1キロメートル以上。突如、黒く濁った潮が頭上より襲いかかる。海に呑まれ、家人は老母を救うために止むなく背中の女子を波間に捨てた。

男子は人手で破屋に投げ上げられて助かったる。男子は人手で破屋に投げ上げられて助かつた

が、実母・兄弟が波に呑まれた。

「どこに行つて死を逃れるというぜよ。もう動かずに入つた」という。

あきらめる祖母を励まして波間を逃れ、足を取られながら、這うように、からうじて仁井田山下の寺へ入つた。

浦戸の山内家御殿「観海亭」を押し流した津波が、他の湾岸を無傷ですませる筈がなく、仁井田・五台山・吸江・横浜・長浜らもすべて山際まで襲つた。五台山の東にある八（屋）頭は冬が過ぎても潮が引かず、人々は山に穴を掘つて命をつなぐ、「目もあてられ」（『谷陵記』）ぬ生活だった。



浦戸の高台から見た種崎・仁井田方面

浦戸の山内家御殿「観海亭」を押し流した津波が、他の湾岸を無傷ですませる筈がなく、仁井田・五台山・吸江・横浜・長浜らもすべて山際まで襲つた。五台山の東にある八（屋）頭は冬が過ぎても潮が引かず、人々は山に穴を掘つて命をつなぐ、「目もあ

## 33—宝永地震⑥ 南国市南部

### 農村 浸水で回復困難

今の南国市南部となる村々も甚大な被害を出した。物部川河口部右岸に位置する久枝・下島・下田の3村は亡所となり、隣接する前浜村・物部村も2分の1、3分の1が亡所と化した。一帯のほぼ中心になる、現高知空港敷地の北に三角点があり、その標高8・3メートル。周囲を含む諸村は5ないし10メートルに過ぎず、そこへ大津波が寄せて押し流された。村々にはどこも寺社があるが、多くが堂社を失い本尊など流したのはもとよりだつた。

かつて滑走路に接する所に命山と呼ばれる山があつた。28メートルの小山だが、周辺に山のない村人たちは4日の地震発生、津波と共にいっせいにこの山へ駈け上り助かつた。室岡むろおか山の本名に、宝山ともいう異称が付けられたと記録される。

土佐湾に一直線で対面する浜改田村は、家々の半ばまで津波に浸された。村の海拔はちょうど10メートル。現南国市南部を襲つた津波の高さを証明していた。勢いは北の沃野にある里改田村にまで寄せ、庄屋は米の被害をこう記す。

流米 弐拾石

同粉 三拾六石

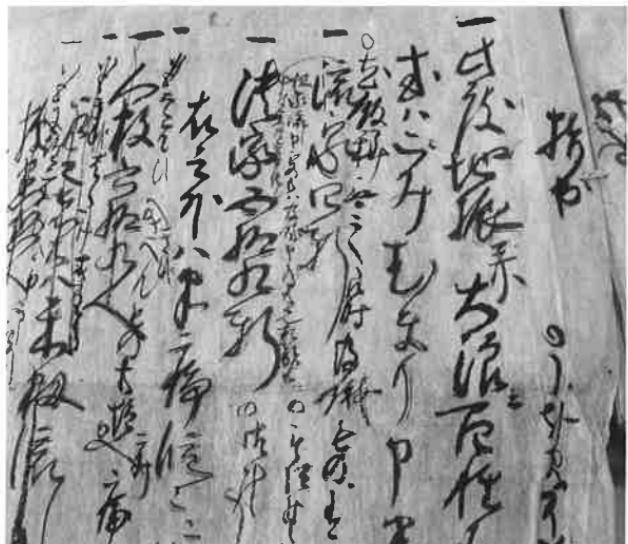
ぬれ米

同粉

百八拾三石

式百拾石 但種粉米

(宇賀家文書)



里改田庄村屋の被害届下書き。潰れ家59棟と書かれる  
(南国市教育委員会蔵「宇賀家文書」)

田を荒地と化す津波は北の立田村との境まで達し、浸水した農村を回復困難な状態にする。これはひとつに、藏福寺島の物部川の堤が決壊したせいもあつた。

加えるに多くの亡所が生じた原因として、地震による激しい倒壊があつた。流家4棟にとどまつた里改田村でも、潰れ家は59棟にのぼつていた。亡所の村々では、倒壊また半壊また傾いた家屋まで、根こそぎ洗い流されたのだろう。

物部川の左岸にある芳原村（現香南市吉川村芳原）も亡所となつたのは、いうまでもない。

## 34—宝永地震⑦ 東部海岸

### 巨木 根元から流され

土佐湾に面した東部海岸線への津波は、高知から安芸までが高くて、安田より東はさしたることがなかつたという。安政地震で述べた岸本・夜須・手結はどうだつたのか。「谷陵記」が総括している。

手結 亡所、潮は山まで、山上の家少し残る

下夜須 半亡所、横浜・知切の家は悉く流る、潮は大宮の庭まで

岸本 亡所、潮は山まで

西の岸本は安政地震時、流失11棟にとどまる。しかし宝永では一転、亡所となり、津波は海岸から2キロばかり入つた若一王子宮まで届いていた。その王子村の人家が直撃を免れたのは、皆、丘陵にあるためだつた。

下夜須は上夜須に対する海岸寄りを言い、内、夜須川河口にある横浜・千切一帯が亡所、それ以外が半亡所となつた。波は、大宮と呼ばれた夜須の總鎮守西山八幡宮の庭まで、奥に向かつては海岸から3キロ近い、上夜須の備後まで達していた。

横浜にあつた銘木の松がこげたのはこの時。美形から傘松と呼ばれた木の高さ約14メート

ル、幹から四方へ15メートル前後を誇る真っ直ぐな巨木だった。それを、合計11回に達した大津波が根元から洗い流した。

湾形の港を掘りこんだ手結に、潮位を高くした津波が襲来するのは自明だった。波は藩の役所から民家らすべてを呑み込む。神社の社殿が千切まで流れ、エビス、大黒の二天像がどこへ行つたかわからなくなる。山まで達したとある津波の高さが、7メートルとされるのも得心できる。

いつぱう、地盤の軟弱な夜須では地震の衝撃はどうだったのだろう。上夜須にある寺の住職は、1時間ばかり激しく揺れて大地に手を着き、「寺ははやつぶれる、はやつぶれると申す計り」だつたと記す。

全体に3地域を通じて激しい倒壊の記録は残されないものの、これは津波の印象がそれだけ強かつたといふことではあるまいか。



若一王子宮から岸本への八丁道

## 35—宝永地震⑧ 室戸半島

### 隆起「安政」上回る

次におきる南海地震について政府の中央防災会議は、室戸半島のすべてを高知中央部などと共に最大の震度階とした。室戸岬は隆起するプレートの先端に近く、そこで撥ね返りが大きくなると予測している。

宝永地震はやはり、昭和・安政両地震をこえる隆起があつていた。「大変記」（南国市、河村洋子氏蔵）という記録にこうある。

宝永年中之津波、古き人之記録を見る所、今之如く津呂・室津、陸六、七尺上る、下モ灘六七尺下かる。

「今」とは安政地震の時。同様に隆起した宝永時の記録が、両地とも180～210センチだつたとする。数字は必ずしも一定しないが、いざれにしろ宝永地震の隆起が、安政地震のそれ（23項参照）を大きく上回っていたのは間違いないようだ。高知の西海岸を指す、下灘とのシーソー運動もよくわかる。

津呂・室津両港への荷船入津はできず、大震によつて各地に山崩れがおこり、大地は割れる。隆起を凌ぐ7メートルの津波も襲いかかり、室津は当時の港に接する耳崎・水尻が破壊され

る。奈良師・元分を合わせて30棟が流失した。

地震の強さは岬を北へ回った、崎浜の寺の記録でもわかる。「大地十間二十間ほど大われ」（南路志）山は崩れた、とある。地面が数10メートルにわたって割れたのだ。

奈半利から野根までの津波は、さして高くなかったらしい。それでも奈半利では野根山街道近くへ大船が打ち上げられたし、羽根では尾僧・夷町・船場の人々が皆、背後の高地へ小屋掛けをしなければならなかつた。その地の八幡宮へ納められた板書には、沖へ300メートル以上引いた潮がどつと入つたと記録されていた。

安政地震で大被害を出した甲浦もそのままには済まず、山内の御殿と3カ寺、水主の家を残し、あとは白浜と合わせて亡所。津波は山まで達していた。



現在の室津。河口近くの小さい港が昔の室津港（航空写真、室戸市提供）

## 36—宝永地震⑨ 宇佐

### 背後に水 逃げ道失う

西部海岸線の被害はいつそう大きかつた。

宇佐は安政地震のとき、昭和地震をはるかに上回る被害が出た。宇佐・渭ノ浜・福島の宇佐3浦だけで流失1060棟、死者・行方不明58人などの結果となつた。しかし宝永地震は更に大きな惨状を呈した。

海没 渥ノ浜・福島

亡所 宇佐

溺死 500余人

海没はもとより亡所で、例えば渭ノ浜を「谷陵記」はこう記録する。

在所、尽く海に没し、深さ五尋六尋あるなれば、別に記す事なし

安政地震でも渭ノ浜・福島の多くは流された。それでもこれほどの津波ではなかつた。しかし宝永津波は、集落を深さ10メートル内外の海の藻屑と化している。仮に1、2メートルの地盤沈下があつたとすれば、そこに寄せる10数メートルの津波は格段に威力を増す。両浦ともひとたまりもないのは明らかだつた。



海拔約50メートルの地点から見た宇佐

東が橋田の奥、西が萩谷口まで押し込んだ宇佐浦への津波も悲惨な光景を見せた。安政時に60棟ばかり残つた家は、宝永時では山上の1棟のみ。しかも集落の背後にある田地へは

潮が真っ先に回り込んだため、「通路を失ひ、溺死四百余入」（「谷陵記」）となつた。

これは安政時、橋が落ちて逃げ場を失い、犠牲となつた福島浦40余人の状況に似る。いつそう巨大だつた宝永津波では、その福島浦が今度は2倍以上となる100余人の溺死をみた。

浦ノ内湾を渡つた横浪半島の先端も大津波の襲来を受けた。龍・井尻の両浦はともに亡所となり、龍の蟹ヶ池は海中に没する。また宇佐の東になる、安政では大災を免れたらしい新居も亡所となつた。やや高い立地でありながら消滅を免れなかつたのだ。

宇佐・青龍寺の過去帳では、女が男の3倍近い死者となつてゐる。なぜ女がはるかに犠牲を増したのか。宇佐に限らぬ知つておきたい共通の課題だ。

## 37—宝永地震⑩ 須崎・野見両湾

### 浅い水深 亡所と化す村

山々が崩れ、大地が割れ、潮水が噴き出し、無事な家は1棟もない。須崎方面も激震で、その被害をいつそう大きくしたのはやはり津波だった。

午後1時頃に入つた津波は12度くり返し、全く潮の来なくなつたのは翌日の夜。人家のほとんどが流失し、溺死者は筏を組んだように海面を漂う。須崎で死者400余人を出したと記す「宝永大変記」は、その原因をこう書く。

池より出る堀川の橋、地震に落ける所へ潮先き入り、渡る便りこれ無く、悉く堀川へ打入られ大半死す

「池」とは今ア西紀町の池。ここから海へ出る堀川に橋がいくつも架けられていた。その橋が落ちた。安政地震時に宇佐・福島浦でみられたと同じような光景が、このとき大規模に起きていた。

須崎八幡宮の記録によると、「潮高さ、四方山根より二間斗ばかり」とある。山には山裾から3、4メートルの高さでかぶさつたわけで、須崎街区を海拔5メートルとするなら、須崎は8、9メートルの津波だったことになる。

かくて須崎湾をとり巻く村浦の亡所が相次いだ。野見湾を含めて東から列記すると、大谷・野見・神田・土崎・須崎・下分が亡所となつた。これらのやや奥となる、吾井郷が名越（名古屋）坂の麓まで海となり、下郷が下分を溢流した潮で半亡所となつた。

野見湾を形づくる最先端には戸島があり、対岸の長者と結ぶ湾内の水深は大半20メートル以下にすぎない。浅い同湾への津波が高くなるのは明らかで、干上がつていた潮が一気に寄せて湾内の集落を流失させた。

（宝永四年）大変以前は戸嶋の人家千軒もこれ有り、今に戸嶋千軒と云伝

（南路志）

「戸嶋千軒」は戸島を主に、もつと広い範囲を指しているのではないか。野見・大谷両村は30数年後、114棟にしか回復していない。史料に不明確な点はあるが、宝永地震で湾内が亡所化したのは事実だ。



野見湾最奥部。手前が野見、左奥が大谷

## 38—宝永地震⑪ 久礼・上ノ加江

### 波は山まで届いた

土佐藩は宝永地震時の死者を、1844人と報告した。一方、被災の模様を村ごとにまとめた「谷陵記」は、死者の具体的な数字を次の5村浦のみにとどめている。

長岡郡種崎	溺死700余人
高岡郡宇佐	溺死400余人
同福島	溺死100余人
同須崎	溺死300余人
同久礼	死人200余人

あわせて1700人を超える死者は全体の9割を超え、その他、2ヶタ以下の村浦は省略している。

久礼はそれだけ犠牲者が多かつた。「中土佐町史」は、庄屋の記録によつて久礼の流死人の内訳を示している。

郷分	882人中、流死13人
浦分	980人中、流死150人

他 61人中、流死2人

このとき久礼郷分は230棟のうち、26棟が潰れ、204棟が流失した。浦分183棟の内訳が書かれないのは、たぶん全棟流失の故ではないか。おそらく久礼はほとんどの家が地震で潰れ、その潰れた家がまた津波によつて流された。郷も浦も、完全亡所だつたといつて

よいだろう。

久礼への津波は、南方が逢坂谷まで、北方が焼坂の麓まで入り込んだ。中央部は、「谷陵記」が常源寺の植松までとするが、常源寺という寺はない。長沢川上流にあつた常賢寺をいつてているのではないか。同書は久礼町中の3分の2が海に没したとしており、これだと概ね符丁が合う。

久礼では久礼・上ノ加江・安和の総鎮守である八幡宮が破壊され、また流失した。他の寺社にも被害が出たが、似たような光景は南の上ノ加江村でも見られた。村の鎮守である弘野大明神、由緒ある禪源寺などまで流された。波は山に届き、上ノ加江もまた亡所となつた。ただ、「谷陵記」が死者数を書いていないことからすれば、溺死は多くても数十名以下にとどまつたということになる。



当時、大きな被害を受けた久礼港

## 39—宝永地震⑫ 幡多沿岸（その1）

### 軟弱地盤 倒壊相次ぐ

宝永地震で中村の町は3分の2が倒壊した。昭和地震で71パーセントが全壊し、安政地震で町家90パーセントが沈下した同町は、宝永地震でも相似る悲惨な光景を見せた。泥土の沖積層の上にたつ軟弱地盤ならではの被害だった。南に隣接する宇（右）山・津野（角）崎で大きな倒壊がみられなかつたのは、固い岩盤に守られた段丘上に建つていたからだつた。

ただ幡多郡全体への影響をみれば、大津波による被害がはるかに大きかつた。

政府の中央防災会議は平成25年、南海トラフ巨大地震対策についての最終報告を行つたさい、高知県西南部への最悪ケースを津波高20メートル以上とした。これは震源域中で最も高いが、独自に発表した高知県はさらに黒潮町・土佐清水市の34メートルなど、幡多海岸の津波高を全体に高くした。

宝永の津波は幡多郡をどのように襲つたのだろう。「谷陵記」は、亡所となつた村浦を次のようにあげる。

佐賀・井田・浮津・入野・鹿持・下田ノ口（現黒潮町）

下田・初崎・名鹿（現四万十市）



山裾まで津波が来た上田ノ口銅山

布本村・下茅・鍵懸・大岐・久百・以布利・  
窪津・大浜・中ノ浜・浦尻・清水・越・養老・

三崎・下川口・片糟・貝ノ川（現土佐清水市）

小才津野・尾浦・西泊・檍ノ浦・周防方・  
小間目・赤泊・天地・橘・泊（現大月町）

榎・福良・小尽・湊・田ノ浦・小浦・内ノ浦・  
外ノ浦・呼崎・坂ノ下・宿毛・貝塚・大島・

深浦・大深浦・梼・宇薄・藻津（現宿毛市）

海岸線にある村落で亡所とならなかつたのは  
15村にすぎず、亡所の割合78パーセント。残る  
多くも半亡所となつた。ならなかつたのは、足  
摺半島の津呂・伊佐・松尾など、比較的海拔を  
高くする村落のみだつた。5メートルから10  
メートルだつたとされる幡多沿岸への津波は、  
どんな被害だつただろつ。

## 40—宝永地震⑬ 幡多沿岸（その2）

### 海拔15メートルの宮 流される

2キロの長大な松原が続く入野村は、130ヘクタールほどの沃野が広がっていた。津波はここを一度に瓦礫と化し、わずか9ヘクタールを残すのみとした。潮は蛎瀬川を遡ること15キロばかり上流の、上田ノ口銅山の下まで達していた。

渡川（四万十川）筋では宇山と津野埼の間に十三反帆の巨大な船が打ち上げられ、潮は佐岡・中村・坂本を結ぶラインの田野を浸し尽くした。

浜より奥へ4キロが海となつた下茅（下ノ加江）でも多くの船が上がつたが、この方面では清水村で、より具体的な数字がわかる。清水湾内の鹿島には現海拔15メートルの鹿島宮があり、波はこの宮を押し流した。そして陸側15・6メートルの位置にある蓮光寺の、上から3段目の石段まで潮が届いたという。今の総段数83段。つまり潮は15メートル程となる。清水は、山間の少しを残して集落が消えた。

西の三崎村は、浦分より一段高い郷分の下之段と同じ高さで襲つてきたという。下之段の平均的海拔は11メートル。三崎村が山腹の一部を残して廃墟と化したのも当然だつた。宿毛は安政地震時と同様、三災を招いている。沖積地にある宿毛の地盤は弱く、宝永の激

震は、家老宿毛山内氏の家臣や町人の住む家屋を一瞬にして倒した。そこに火災が発生するや、津波が寄せだし、破屋が土居の豪邸前で漂うところへ3番の大津波が入る。土居館だけが残ったというから、南半分ばかりの浸水にとどまつた安政時より、遙かに大きかつたわけだ。



蓮光寺の石段

大島村には東の海岸近くに鶴社がある。その石段42段（今は1段増）。寄せた3番波は3段のみ残した。境内つまり最上段の海拔は10・8メートルだから、およそ10メートルの津波だつたとなる。

それでも幡多沿岸に大量の溺死者は出なかつた。津波の襲来が東部よりも遅かつたためではないか。もし、震源がもつと西に寄つていたらどうなつていたか。地震の発生時間ともども考えねばならぬ教訓だ。

# 41—慶長地震

## 宝永地震を超える被害

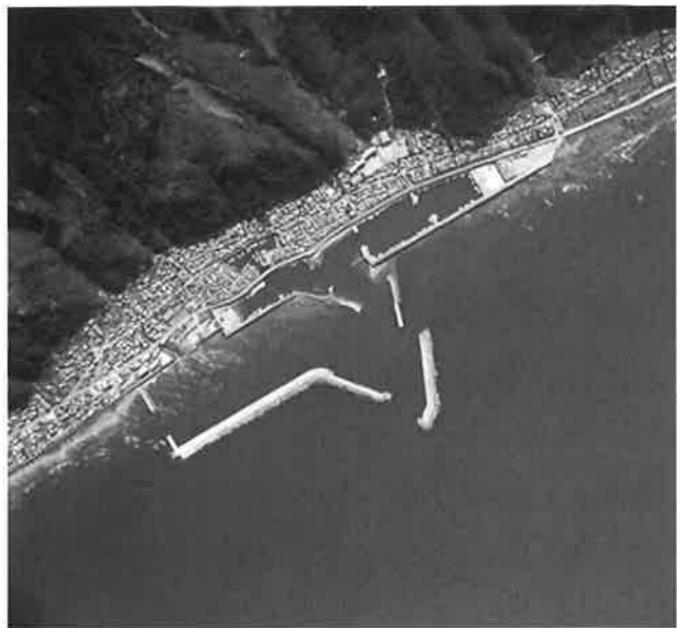
宝永地震より遡ること103年前、慶長9年（1604）にも大地震が発生した。ただ、マグニチュード7・9とされる地震の震源については諸説あり、南海トラフが主震源域なのか、それとも連動地震なのかも含めて未解明な点が多いようである。

明らかなのは、大規模な津波が房総半島から九州まで、広い範囲に及んでいたことだつた。12月16日午後10時頃、土佐の海岸線に津波が寄せる。東の国境・甲浦から西の幡多郡佐賀、三崎らまで。佐賀では家々を浸し、三崎浦では男女153人を流死させる。今の室戸市元では宝永よりも6尺ばかり高かつたと記録され、このあたりが9メートルほどの津波だつたといふことになる。

数少ない史料中、崎浜村（現室戸市佐喜浜）の大日寺に残されていた、暁印という客僧の置文おきぶみが「南路志」に記録される。この場合の「置文」は遺誠をさすと思つてよい。

四海浪の大塩いつて国々の浦々を破損し、崎浜にも男女五十余浪に死、（中略）東寺・西寺の浦分は男女四百人余死、甲浦は三百五拾人余死、宍喰には三千八百六人余死  
宝永大津波のとき室戸半島は、室津と元で多少の人家流亡をみただけだった。ところが慶

長大津波では、目を覆うばかりの惨状を見せた。金剛頂寺・最御崎寺の下にある元・浮津・津呂の浦分、また崎浜・甲浦を合わせた、800人以上の溺死人を出していた。



現在の室戸市室戸岬町。画面中央の最も陸よりの港が江戸時代の津呂港  
(室戸市提供)

置文は、さらに隣国阿波へ北上して宍喰(現海陽町内)の、にわかに信じがたいほどの犠牲者数を示している。異説に1500余人があるなど不確定ではあるが、その少し北の鞆浦(同町内)には、高さ10丈(30㍍)の波で100余人が沈んだと記す碑がある。

このとき野根村には津波が入らなかつた。ビームの動きなどが影響しているものか。それでも全体、阿波南部から室戸半島を回った付近まで、想像を絶する、突出した被害だったことは確かだ。

## 42—正平地震

### 南国の寺 津波に襲われる

甲浦の北になる隣国阿波の宍喰には、永正9年（1512）8月に大津波が襲来し、3700余人の死者を出したとの記録が残る。南海トラフ巨大地震の周期からすると、或はこれもと考えられるが、地震の記述が全くないことと、本県など他県に史料がみられないことからこれ以上の推測は控えたい。

慶長9年より243年前、永正9年よりなら151年前の、正平16年（1361）にも巨大地震が勃発した。北朝元号によつて康安元年地震とも呼ばれるこれは、マグニチュード8.4、東経135度・北緯33度が震央だつたと推定されてゐる。だとするなら安政地震とほぼ同じ震源となるわけだ。

発生したのは6月24日午前4時頃。

大坂・奈良・紀伊の寺社などが倒壊、破損した記録がみられる中で著名なのは、阿波の由岐浦が大被害を受けたこと。その頃の室町時代に生まれた「太平記」に、大潮の襲来で1700余棟が引き潮に持つていかれ、在宅の人もろとも海底に沈んだと書かれる。土佐でも室戸半島東岸に大被害が出たかと想像される。ただ、これを南海トラフ巨大地震

とみるためには、土佐湾側の被災記録が求められる。その意味で江戸時代の史料集「南路志」に、わずかに残された次の1通は貴重だ。



正興寺跡と推定される田。トラックの手前（南国市前浜）

土佐國田村下庄正興寺院主職并  
供田「  
（中略）

右件供田は、本寄進状は康安元年  
六月廿四日大塩之時紛失せしむと雖

（下略）

同書前浜村（現南国市前浜）の項で紹介されるもので、地震から34年後の応永2年（1395）の文書だ。その頃、田村下庄にあつた正興寺が、正平の大津波で寄進状を流されたとわかる。同寺跡とみられているのは、現前浜公民館の西に広がる田の中。五輪が少し残るこの辺りは海拔5メートル前後だから、津波は6、7メートルの高さだったか。

## 43—康和地震

### 浦戸湾周辺 地盤沈下か

高知県を含む南海トラフ巨大地震は、正平16年（1361）までの記録を振り返ると、大体120年前後の周期で起きているのではないかと推測されることがわかつた。以下はその周期に合わぬが、これは時代を遡るほど記録が無いにすぎない。

平安時代後期の康和元年（1099）正月24日、奈良や摂津の寺社に被害の出る地震があつた。そこで畿内周辺に限定される地震とみられていたが、同日と考えられる日に土佐で大規模な被害が出ていることから、今では南海地震とされるようだ。

京の公家が日記の裏側へ記した文書に、土佐国司に下した弁官下文べんかんくだしふみというものがある。後半を欠くが、賀茂社領として土佐国津野の一部を新たに認めるとしたものだ。解状げじょうという申請に答えたその文中に、次の部分がある。

寛治立券管土左国潮江庄、康和二年正月□四日地震之刻とき、国内作田千余町皆以海底に成り畢おりなん、社領□（潮）江御庄海浜に近きに依り又以同前

〔高知県史古代中世史料編〕

「二」年は誤記とみられている。康和元年地震のとき、土佐の田地1000余町が海底に沈

んだ。寛治年間（1087～93）に生まれた潮江庄も、浜辺近くだつたばかりに海没したという。

新たな津野庄はその代替庄園だつたが、認められた玄米高30石。面積的には3～6町歩と考えられ、つまり50町ばかりの、低田地が多かつたかと思われる今の鏡川河口南側の潮江地方は、ほとんどが海水に覆われたのだろう。



明治の浦戸湾（高知県立図書館蔵「浦戸港及高知」より）

しかし、土佐で海底に沈んだ総面積は1000余町。潮江はごく一部に過ぎず、これは当然に、浦戸湾周辺の広い低湿地海没が想起される。そこで原因として、シーソー運動による土佐中央部の強い地盤沈下があつたとみるのが自然だ。1000余町の方は、浦戸湾に流れ込む鏡・久万・国分3河川の、塩田を始めとする河口周辺の低地が主だつたと思うのである。

## 44—白鳳地震

### 田1000町歩が海に

土佐を襲つた地震で最古の記録を残すのが、飛鳥時代に起きた白鳳地震だつた。マグニチュード8・4ともされる規模は宝永地震クラスか、それに近いといえ、これも南海トラフ巨大地震だつたと推定されている。

東経134度・北緯32・5度とみられている震源は、これまで述べてきた後代のものよりも、ぐつと土佐沖側へ寄り、それだけ土佐の受けた被害が大きかつた。天武天皇13年（684）10月14日条の、「日本書紀」は記す。

いのとき  
人定に逮りて大地震、（中略）時伊予湯泉没而<sup>うもれて</sup>出<sup>で</sup>ず、土左国田苑五十余万頃、没て海となる、古老曰、是の若き地動、未だ嘗て有らざる也

「人定」は亥の刻、今の午後9時から11時。大地震が起こり、山々は崩れ、諸国の役所・神社仏閣などが倒壊した。伊予国の温泉が埋もれてしまうなかで、土佐は田地が海に没したとある。その面積50余万頃。「頃」は「代」と考えられており、古代は1代が5歩とされていたから、50代を1反として1万反。つまり1000町歩となる。

どこが海没したのだろうか。土佐では415年後の康和地震でも1000余町が沈んだ。



上空から見た浦戸湾と高知市街（国土交通省四国地方整備局提供）

つまり海没はこれとほぼ同じと考えねばならない。そして最大2メートルの地盤沈下があつた宝永地震では、今の高知市東半平野部の大方が水没している。おおよその該当する範囲から、今より広かつたであろう浦戸湾域と、山分を除けば、ほぼ似た数字になるのではないかろうか。

宝永でも沈む野見湾など一部追加はあり得ても、近世に書かれた根拠のない黒田郡伝説などはどうなずけない。以後の地震歴から海没は、陸側プレート先端部の跳ね上がりにともない、より内側にある高知平野部などが反動で沈下したため、と考えるのが自然だろう。

この地震は大津波も発生し、国司は「大潮高騰、海水飄蕩」、調（税物）を運ぶ多くの船が失われたとも報告している。

## 45—地震のまとめ

### 有史の時代 2000年に満たず

太陽暦416年とみなされる允恭天皇5年の条の「日本書紀」に、次の文がある。

秋七月丙子朔己丑、地震、是より先つねほど葛城襲津彦之孫玉田宿祢に命じ、瑞齒別天皇之もり殯もがりを主らしむ、則地震夕に当り、（下略）

丙子を朔とする「己丑」は14日。「日本書紀」に出る、有史日本の地震に関する最初の記述だ。無論、土佐のことが書かれているわけではなく、都での天皇の葬送記述の中で触れたにすぎない。

しかし、概ね120年前後の周期で南海トラフ巨大地震が起きていることは、少なくとも中世以後はわかつてきた。それより以前も同様だったことは当然、考えておかねばならず、これを解明する上で近年は、水中考古学、土壤学、地質学などといった分野の援用も増しているようだ。

野見千軒、戸島千軒といった伝承は、例えば幡多郡大月町の古満目、柏島といった所もある。人為の跡が残つているとすれば調査できるかもしれない。筆者が少年時代を過ごした黒潮町入野浜の小島には、今は海没した岩肌に、指さしと「十一里」の文字があつたという。

或はこれも地震と関係あるかもしだれない。

平成23年10月、内閣府設置の南海トラフ巨大地震モデル検討会委員である岡村真高知大学特任教授は、陸側ブレートの沈降域にある、土佐市蟹ヶ池の地層の調査結果を報告した。堆積物による津波調査と放射性炭素調査で、津波回数と年代測定を一定、解明したものだ。

江戸時代の測量家伊能忠敬は土佐で測量中、同国では宝永地震で東が上がり西が下がった

下をさすあとを左のとく

ヨ文化五年戊辰予測量便 伊野  
勘解由

久東亀高クナリ西ハ低クナリシト云  
スル國ニヨレ怪ニロス旦南北ニ

テキテ海トナリ上西ニシタニ

ナル次上

土佐で測量中の伊能忠敬が地震の質問に答えた部分を記す  
「三災録」(高知市民図書館蔵)

との間に、「地の高下する  
事国々に多し、怪に足らす」  
〔三災録〕と答えた。既に  
科学的な目で地震を見て  
いたわけだ。

有史の時代はたかだか  
2000年に満たず、億の  
世界である地質学の面から  
みた、長期的変動も又、頭  
に入れておかねばならない  
ようだ。

# 46—昭和50年5号台風（その1）

## 集中豪雨 強風被害も

昭和50年8月17日、宿毛市へ上陸した台風5号は本県に未曾有の大被害をもたらした。室内台風が襲った同9年と違い、まだ記憶に新しい頃だ。昭和初期に比べれば防災技術は格段に進んだであろうに、本県はこの台風で77人の犠牲者を出した。

午前8時50分上陸の中心気圧は960ミリバール、最大風速40メートル。中型で並みの台風とされ、襲つたのは昼間、コースは四国の西海岸をかすめて周防灘へ抜けたにかかわらず、大きな被害を出した。

わけは記録的な集中豪雨だった。高知県の年間降水量約2500ミリ。その3分の1程が台風通過時に集中した地域があつた。そこで目を疑うような光景が各所に起きた。

左巻きに渦巻く台風は、東側でより強い風となる。足摺岬で最大瞬間風速52メートルを記録し、土佐清水市や中村市（現四十市中村）で家屋倒壊が相次いだのはこのためだった。ところが台風は後方に巨大な雨雲を生み、南北に長いこの降雨域が渦の東側からどんどん流れ込む。帯状となつて安芸郡北部と県中央中山間部に豪雨をもたらした。

しかし、奈半利川上流筋となる安芸郡の北部山間は、700ミリを超えたにかかわらず、

中央中山間部程の被害は出なかつた。尾鷲とならび降水量の多い馬路村は、日頃から山に耐力ができていたのだろう。



日高村岡端（おかげな）付近の浸水＝日高村役場提供

ところが被害はもう1つの要因が一層大きかつた。

中央中山間部の被害の一つは、平地部の湛水による浸水だつた。筆者はこの年春、生まれ故郷佐川町の歴史文化調査に従事していた。直後に町内の平地ことごとくが水に浸かり、町内柳瀬川では9橋が流失した。日高村は低地とあつて普段から湛水しやすく、排水機能も今日のように無い。村全体が水浸しになつたと言つてよく、役場には床上2メートルまで水がきたとの目印が今も残されている。土佐市や伊野町の平坦部も多くが床上浸水となつたのは言うまでもなく、県下の床上浸水1万2000棟を超えた。

# 47—昭和50年5号台風（その2）

## 総雨量600ミリ 斜面崩壊

雨は、台風が去った昼頃からむしろ強くなり、しかも、雨雲が覆う中央中山間部には仁淀川が貫流する。支流がある佐川町では12時からの1時間雨量が108ミリに達し、同じく吾北村（現いの町）上八川では総雨量800ミリを超える。右2カ所を含む広い一円で総雨量600ミリ以上となり、これが各地の山に土石流と斜面崩壊を生んで大参事をもたらした。

県全体で77名の死者・行方不明者を出した多くは、山崩れか土石流による犠牲者だった。5人を亡くした日高村本郷妹背の沢は、増水し始めた水が夕方4時40分頃いつたん止まつた。直後にドーンという大音がし、大量の土石流下を見た松岡貞夫さん（81）らは、土石の上を飛び石伝いのように逃げたという。斜面の土壤を崩す斜面崩壊から起きた土石流だった。同地区では山崩れと合わせて12人を亡くし、村全体で16人の犠牲者を出した。

南の妹背と北の上八川の中間に仁淀川支流勝賀瀬川沿いには、中追・長原比<sup>なごらび</sup>・勝賀瀬の3地区がある。家屋倒壊と埋没が続出したものの死者は中追の1人にとどまり、長原比の大規模な埋没は渓流堆積物の流出によるとされた。

上八川の寺野に起きた斜面崩壊のスケールは大きく、高さ60メートル・幅70メートル、斜

度40度の、植林して間もない山を一気に崩した。発破をかけたような音がし、白い煙状のものが昇つて斜面が一瞬、浮き上がった

という。その少し前、200メートルほど西に住む野村二三子さん(87)は、沢の土石流出に危険を感じて東の斜面にある竹藪へ避難した。その後すぐ近くでの大崩壊だったわけだが、気が付かなかつたという。崩壊現場は北へ回り込んでおり、川の流れや雨の音が耳を衝いていたためでもあろう。

記録的な豪雨は、日中にもかかわらず多大の犠牲者を出した。日高村以外でも旧伊野町8人、旧吾北村3人の死者が出、鳴川など平地部に流れ落ちた土佐市、また越知町でも4人というよう、仁淀川流域での死者が多かつた。



寺野の崩壊現場。砂防ダムの向こう側の斜面

## 48—長者地滑り

### 今なお懸命の対策

吾川郡仁淀川町長者地滑りは、今も少しづつ続いているという。傾斜地の表層土塊が、地形や地質の内的要因、また地震・豪雨などの外的要因によつて起る、地滑り。知識がないと、ふだん目に見えないから危険を感じないが、いつたん大崩壊を起こすと手が付けられない。

この長者地区は、地質学的に蛇紋岩が所々に顔を出すことで知られる。蛇紋岩は風化しやすく、滑りやすい。水分を含むと、粘土質になつて軟らかくなるのだ。そこで学者によつては、長者の地滑りを奈良時代という遙かな過去にまで遡らせる。

長さ約900メートル、幅約200メートル、面積2千平方メートル近い大規模な地滑りが、ときにどんな被害をもたらしたか。ここは情報が残された明治19年（1886）に絞つて紹介する。

同年は台風が8、9月の2度にわたつて高知県を襲つた。長者中心地から南西方角の太郎田山中に発した長者川は、9月10日の再度の豪雨でその中心地、宮ヶ坪みやがなあたりの流路を変えた。水勢で追土橋おつちばしという橋の先の小丘を突き壊し、西山裾を走つていた曲流を一気に直線へと変

えた。そしてほぼ同時、川の西側斜面にある集落である、長者寺野の地下が鳴動しだした。

十五町許ばかり東南、星が窪おゆきと云へる所より

横に葛原の小峠迄、其間おおよそ大凡八、九町  
決裂し、其裂口六尺に及べるにぞ

(「皆山集」)

寺野の東南山上に星ヶ窪おゆきという、くぼん  
だ台地がある。そこに近いあたりから決裂  
が起き、40余棟ある寺野の家々は音をたて  
て移動し、倒れだす。昼間が幸いして死傷  
者を出すことなく、200人ほどの住民は  
皆、山へ逃げ込んだが、家はもはや無い。  
新しい屋敷を構え、耕地を開かねばならぬ  
苦難が待つていた。

今も続く地滑りは、長者川の方向となる  
北向きである。その末端部は同川を越え、  
対岸で隆起しているそうだ。現在も懸命の  
対策がとられている。



長者の地滑り現場。写真上部中央から下方全体が滑っている

## 49—加奈木大崩壊

### 泥岩、砂岩 地盤もろく

「加奈木の潰え」というこの大崩壊は、日本でも屈指のひとつにあげられている。

室戸市と北川村の境、佐喜浜川と蛇谷川の分水嶺であるこの地は江戸時代の野根山街道で知られ、標高およそ1000メートル。すぐ西に装束峠、東に岩佐番所の史跡がある。崩壊地は、その分水嶺より東斜面の室戸市側に残る。

野根山街道はいちど歩いたが、1カ所、大崩壊の跡らしき所を見た。しかし、まだ見ぬこ  
こは別格のようだ。昭和25年に現場を見た、地質学者の故・甲藤次郎高知大学名誉教授は、  
崩壊した谷の最大幅約500メートル・長さ1000メートルとした。管理する四国森林管  
理局はその面積を45ヘクタールとしており、ほぼ合致する。

奈半利川層といわれる一帯の地層は新生代第三紀に属し、崩壊地の岩質は、泥岩を主とす  
る砂岩と泥岩の互層という。泥岩は風化に弱く、地震や豪雨によつて当然崩れやすくなる。  
崩壊の始まりについて、宝永4年（1707）あるいは延享3年（1746）とするもの  
を見かけるが、確かな史料は無い。室戸半島は既述のように、新しくは安政、古くは慶長・  
正平地震でも大被害があつた筈で、どの地震で崩壊していくてもおかしくない。ただ、宝永地



昭和14年に撮影された加奈木崩壊地＝四国森林管理局提供

震時には35項で紹介したように、室戸半島先端部が隆起し、崎浜（佐喜浜）では「大地十間二十間ほど大われ（中略）山はつ（潰）へ」（南路志）という記録が残されている。佐喜浜川の水源といえる、地層のもろい加奈木で何もなかつたとは考えにくい。

宝永年間より少し前、峻山の野根山街道を歩いた江戸の文人が感想を書き残した。

かしらをふみ、背（な）かをのほるかこと  
し、岩かとすると（銳）にて、やすりをふ  
むこゝちす

（「皆山集」）

もし、大崩壊を目にしたらどれ程か脅威を感じたことだろう。現場は大正6年（1917）から高知営林局の直轄事業として工事が進められ、昭和39年に完了した。

## 50—奈半利川洪水

### 3年に1度 水あふれ

今日と違つて防災技術が低く、ほとんど科学知識が無いといつてよいような江戸時代、台風や長雨による洪水は、天災の一言で原状回復を果たすだけの場合が多くった。

安芸郡北川村の西谷で名元(なもと)（小庄屋）を務めた来助は、ほぼ50年間の日記を残した。見ると、3年に1度位の割合で大洪水の記述がある。西谷より2キロばかり下れば奈半利川の本流があつて、北川の人々はいつもこの暴れ川に苦しめられた。下流筋の村浦を合わせ、簡潔に被害をまとめている。

寛政11年（1799）8月、数日前から激しさを増しつつあつた雨風が、19日午前6時より一気に強くなつて4時間ほど荒れた。

柏木之老(ときお)為助方、本家敷水入、坐より上三尺程也、長山の田砂入、田野浦・福田寺の砲み切る、奈半利の多喜の宮迄ツツ水に相成

同村内となる柏木の為助宅は床上三尺、同長山の田は土砂に埋まり、現田野町では福田寺の堤が切れ、現奈半利町では北山裾にある、今、多氣坂本神社という所まで水で溢れた。

田野・奈半利の被害は田野浦の浪人の日記により詳しい。およそ50年ぶりの大出水は田野

の町中を海と化し、人々は漁船や高瀬舟で移動する。3つの町で異なる浸水は、5尺から8尺の深さに達していた。「鮎ガエリ」と呼ばれた奈半利川の奈半利町と北川村の境では、工事

中の現場に大破損がおきた。

これは一例に過ぎない。同人の日記には、大雨で材木が数千本流れたとか、洪水のため潰れ家100棟・流失5棟などと連年記される。先の来助の日記はこれに加え、頻発する伝染病の記述が目に入る。地盤の弱い同時代、相次ぐ出水・台風で村の地力をさらに弱くする。そこに疫病が発生すればひとたまりもない。それをどう対処したらいいのか、詰めた。

私達は科学の発達した今日に生きる幸せを感じ、天災を克服する気概は保ちつつ、自然への畏怖と敬意の心もまた失つてはなるまい。

(終)



来助日記=北川村立中岡慎太郎館提供

## 主な引用・参考文献

- 『高知県地震津波史料』 昭和56／科学技術庁国立防災科学技術センター
- 『南海地震の碑を訪ねて』 木村昌三・小松勝記・岡村庄造編／平成14／毎日新聞高知支局
- 『5万分の1沿岸の海の基本図海底地形地質調査報告・海底地質構造図』 海上保安庁水路部編／1998／海上保安庁水路部
- 『高知地盤図』 高知地盤図編集委員会編／1992／社団法人高知県建築設計監理協会
- 『史跡高知城跡保存管理計画策定報告書』 昭和57／高知県教育委員会
- 『高知県天災年表』 昭和26／高知測候所
- 『南海大震災誌』 広木三郎編／昭和24／高知県
- 『高知営林局史』 高知営林局史編集委員会編／昭和47／高知営林局
- 『日本の地震と津波—南海道を中心に—』 沢村武雄著／昭和42／高知新聞社
- 『日本書紀』 井上光貞他校訂／1967／岩波書店
- 『日本書紀』 小島憲之他注／1998／小学館
- 『太平記』 長谷川端校注／1998／小学館
- 『明治天皇紀』 一 宮内庁著／昭和43／吉川弘文館
- 『土佐国群書類從』 五 高知県立図書館編／平成15／高知県立図書館
- 『南路志』 2・3 高知県立図書館編／平成3／高知県立図書館

- 『皆山集』 6 平尾道雄他編／昭和48／高知県立図書館
- 『高知県史近世史料編』 高知県編／昭和50／高知県
- 『真覚寺日記』 一 真覚寺日記改訂版編集委員会編／平成23／土佐市郷土史研究会
- 『補註幡南探古錄』 亀井釣月著・沖本樵児補註／昭和41／土佐清水市史刊行会
- 『南国市史資料・田村誌編』 2・3 南国市史編纂委員会編／昭和62・63／南国市教育委員会
- 『北川村史史料編』 中 北川村教育委員会編／昭和56／北川村教育委員会
- 『渡川改修四十年史』 建設省四國地方建設局中村工事事務所編／1970／四國建設弘済会
- 『河戸堰』 1996／宿毛市教育委員会
- 『土佐清水市文化財調査報告書』 1965／土佐清水市教育委員会
- 『高知市史』 高知市編／大正15／高知市役所
- 『図録高知市史』 高知市文化振興事業団編／平成元／高知市
- 『南国市史』 下 南国市史編纂委員会編／昭和57／南国市
- 『土佐市史』 土佐市史編集委員会編／昭和53／土佐市
- 『宿毛市史』 宿毛市史編纂委員会編／昭和52／宿毛市教育委員会
- 『北川村史』 北川村史編集委員会編／平成9／北川村教育委員会
- 『香我美町史』 上 香我美町史編纂委員会編／昭和60／香我美町
- 『夜須町史』 上下 夜須町史編纂委員会編／昭和59・62／夜須町教育委員会
- 『佐川町史』 上 佐川町史編纂委員会編／昭和57／佐川町役場

『仁淀村史』 仁淀村史編纂委員会編／昭和44／仁淀村

『中土佐町史』 中土佐町史編さん委員会編／昭和61／中土佐町

『大方町史』 大方町史編修委員会編／昭和38／大方町教育委員会

『大内町史』 中田八束著／昭和32／大内町史編纂委員会

『高知市史研究』 二・三・四 高知市史編さん委員会（室）編／平成16・17・18／高知市史編さん室

『土佐史談』 関係号 土佐史談会

『南国史談』 一八 南国史談会

「南海トラフ巨大地震対策について（最終報告）」 平成25／中央防災会議

「南海トラフの地震活動の長期評価（第二版）について」 平成25／地震調査研究推進本部

「昭和21年南海大地震調査報告－水路要報－」 平成23／第五管区海上保安本部海洋情報部

「谷陵記」 高知県立図書館蔵

「宝永大変記」 高知県立歴史民俗資料館蔵

「木屋地震日記」 高知県立図書館蔵

「嘉永七年須崎地震津波記」 公文久雄氏蔵

「1975年8月17日台風第5号による高知県中部の災害現地調査報告」 昭和51／国立防災科学技術セ

ンター企画課資料調査室

「来助日記」 北川村立中岡慎太郎館蔵

記載の南海地震・津波年表

天武天皇	13	10	14	(684)	白鳳地震
康和元	• 1	• 24	(1099)	康和地震	
正平	16	• 6	24	(1361)	正平(康安)地震
慶長	9	• 12	16	(1605)	慶長地震。房総半島から九州まで大津波
宝永	4	• 10	4	(1707)	宝永地震。紀伊半島沖を震央。大津波
安政元	• 11	• 5	(1854)	安政地震。紀伊水道沖を震央	
昭和21	• 12	• 21	(1946)	昭和地震。紀伊半島沖を震央	

(  
付  
録)

谷陵記

これは宝永4年（1707）10月に起きた宝永南海地震・津波の、土佐での被害をまとめた記録である。書いたのは当代土佐の歴史学者奥宮正明。史料編纂に優れた人で、他書同様、本書も事実のみを淡々と記す姿勢を保つていて信頼できる。宝永地震はくわしく記録に残るものでは最大の被害だつただけに、今日、南海トラフ地震にそなえる我々としては必読の内容といえる。

なお、底本は高知県立図書館本によつた。

注一 旧字体は新字体とした。

二 異体字は現今活用字体とした。

三 「𠂔」は「トモ」、「メ」は「シテ」とした。

四 返り点は元のままである。

五 割書きは一部括弧書きとした。

(表紙)

谷陵記 全

(本文)

谷陵記

宝永四丁亥年十月四日未ノ上刻大地震起リ山穿テ水ヲ漲シ川埋リテ丘トナル國中ノ官舎民屋悉ク転倒ス  
逃ントストレトモ眩メクルメイテ压オシニ打レ或ハ頓絶ノ者多シ又ハ幽シシ寒谷ノ民ハ巖石ノ為ニ死傷スルモ若干ナリ係カ  
ル後ハ必ス高潮入ナルヨシ云伝フナドツブヤク所ニ同下刻津浪打テ海辺ノ在家一所トシテ残ル方ナシ未  
ノ下刻ヨリ寅ノ刻マデ昼夜十一度打来ル也中ニモ第三番ノ津浪高ク山ノ半腹ニアル家モ多ク漂流ス國中  
ノ死人二千余人當國ニ不限伊予阿波紀伊摂津長門ノ海辺モ頗ル破壊ニ及フ其外西國中國関東ハ地震計ト  
云江戸ヨリ太坂マデノ模様如レ斯ノ

江戸駿河原マテ小地震

芳原家倒ル死人ナシ

神原油井破損清見寺膏薬屋不残潰ル

澳津江尻家大ニ倒ル

岡部藤枝島田金谷日坂上ニ同シ

懸川家大ニ潰袋井残ス潰ル

見付浜松半潰レ舞坂同シ

荒井津浪打テ御番所流ル

二川半潰レ

吉田城潰ル町屋モ大ニ破損

御油赤坂藤川事ナシ

岡崎小破橋落ル

池鯉鮒事ナシ

鳴海宮半潰大垣ノ城破損

桑名事ナシ四日市マテ橋ナシ四日市半潰レ

石薬師庄野龜山小破

関大津マデ小破

大坂 地震崩家一万四千十五軒○高潮入大船小船競落ス橋数三十八○家倒レ庄ニ打レ或ハ高潮ニ溺ルト  
モ死人一万五千二百六十三人

又隣国ノ様子

阿波 徳島士ヤシキ二百三十軒民家四百軒地震ニ潰ル潮入ハナシ黒土浦郷トモ潮入亡所富岡浦郷小破橋

半亡所泊浦小破井佐ヨリ志和木マテハ存亡不知由岐両浦トモ亡所溺死夥シ木岐亡所日和佐事ナシ

牟岐両所トモ亡所溺死夥シ浅川在家大形流失死人少シ海部堅浦事ナシ鞆小破穴喰亡所死人少シ

伊予 宇和島領城小破本町弓町糺崎マテ大潮入家財悉ク流失吉田浦ト云所ハ民家五十軒斗流失

此所ノ潮ノ高サ平地ヨリ八九尺斗上ル今治領吉田領大洲領松山領モ海辺ノ郷浦悉ク大潮入ケレト

モ大破ハナシ

総シテ当国潮入ル在々所々田苑ハ云ニ及ハス故ノ市井ハ大半海底ニ沈没シ嶺山却テ平地トナリヌレバ新モトニ国土ヲ生出シタル心地ナリ凡ソ世ノ中ノ物語ハサシモ異々シク聞ヘシモ古ノアタリ其実ヲ失フ更多力ルニ此程ノ損廢ハ引カヘテ言語文墨ニモ尽ス事能ハズトイヘトモ其梗概ヲ記ス事如レ左ノ

安喜郡

甲浦  
亡所潮ハ山マデ御殿并寺院三ヶ寺水主ノ家三軒残ル番所一軒屋具斗残ル舟越ト云所ハ潮入ケ

レトモ家流レズ

白浜

亡所潮ハ在所残ナシ家ハ少シ残ル

生見

潮ハ田町マテ家ハ事ナシ

奇ノ兵

事ナシ

三

事ナシ

洋口

耳崎ヨリ打入ル潮ニ湊ノ東水尻ト云所ノ家流ル其外事ナシ

浮津

事ナシ

元

磯辺ノ家少シ流ル潮ハ田丁三ヶ一迄慶長九年ノ潮ヨリ六尺卑シト云

喜良川

事ナシ

羽根

事ナシ

奈半利

浜ノ在家亡所御殿辺ノ家流ル潮ハ田丁残ナシ

田野

事ナシ

安田

事ナシ

唐浜

潮ハ田丁マテ家ニハ入ラス

下山

事ナシ但幸野家ハ流ル

伊尾木

潮ハ山マテ家少シ残ル

川北

松田嶋窪田亡所柄川本村無レ事

土居

本村ハ事ナシ玉作ハ半亡所

安喜浜

半亡所潮ハ北田丁十町ホドマテ新城新在家亡所

赤野

潮ハ田丁マテ流レ家鮮シ

和食

潮ハ田丁ニ少シ入ル

香我美郡

手結

亡所潮ハ山マデ山上ノ家少シ残ル

下夜須

半亡所横浜知切ノ家ハ悉ク流ル潮ハ大宮ノ庭マデ此浜ノ笠松流ル屈枝蟠根無双ノ名木也可惜

岸本

王子

赤岡

古川

芳原

亡所潮ハ山マテ

塙ハ田丁マテ家ハ山上ニアルユヘ事ナシ

潮ハ在所残ナシ流家三ヶ一

半亡所流家鮮シ

亡所浜并松ノ外ニ古田出ル畔ノ形チ顯然タリ地一反バカリハ并松ノ西ノ端ニアリ庄屋ヤシキヨリ申酉ニ当ル庄屋ヤシキハ古ノ土居ノ跡ナリ地二十代ハカリハ并松東ノ端少シ西ヘヨリテ同所ヨリ辰巳ニアタル里人云此所沙浜モ高潮推剥推流シケレハ今ニシテハ此古田ノ幾ハク底ヨリ出タルト云事ヲ知ラス但此松杉ハ昔ヨリ当所ノ墓地ニシテ常ニ七八尺ホルトイヘトモ終ニ如斯ノ土ナシ爰ヲ以相計レハ深サ一丈ノ内ナラシ○愚案ニ右ノ古田秦氏ノ地検帳ニモ不レ載何レノ代没セシト云事モ拠ナシ上ニ三圃四圃ノ松樹生植ヌレハ決シテ三四百年來ノ物ニアラズ

潮ハ芳原境マテ家少シ流ル

三ヶ一亡所

在家中半迄潮入流家少シ

下島

久枝

下田村

前ノ浜

亡所

亡所

亡所

上田村

物部

カミ

野市

野市

物部

上田村

下島

久枝

下田村

前ノ浜

長岡郡

里蚊居田 潮ハ家迄

浜蚊居田 潮ハ田丁残ナシ家ニハ中半マテ流家ナシ

十市 潮ハ田丁中半迄

池 潮ハ田丁ニ少シ入

仁井田 潮ハ山迄在家ニハ三ヶ一

種崎 亡所一草一木残ナシ南ノ海際ニ神母ノイケ  
ノ小社残ル誠ニ奇也溺死七百余人死骸海渚ニ漂泊シ行客

哀傷ニ堪ヘス且臭腐忍ブヘカラス

下田 潮ハ田丁残ナシ家ニハ三ヶ二

衣笠 上ニ同シ

五台山 潮ハ山迄家ニモ

吸江 上ニ同シ

八頭 潮ハ山迄家ハ檣ヲ浸シ冬ヲ終テ千落サレハ居民所ヲ失ヒ山廻穴居ノ有様目モアテラレス

桂島 上ニ同シ

高須 潮ハ田丁中半迄

介良

大津 上ニ同シ

土佐郡

布師田

潮ハ田丁中半迄家ニハ少シ

一宮

潮ハ二王門迄

アソブノ  
勘野

潮ハ田丁迄

比島

潮ハ山迄家ニモ

秦泉寺

潮ハ田丁迄

江ノ口

潮ハ在所残ナシ家ニハ三ケニ

高知

堅固ニ設タル家ハ地震ニ倒レ或ハ破損御城ハ全シ潮ハ町ハ真如寺橋ヨリ北見通シ限り江ノ口

堀スチハ常通寺橋限り潮江川ハ常通寺島限新町下知ハ海ニナル

潮江

潮ハ山迄家ニモ

右内海分ハ初ノ打入シ日ヨリ定潮トナリ聊モ干満ナシ潮江下知新町江ノ口ヨリ一宮布師田大津介良

下田衣笠マテ一般ノ海ニナリ船ナラテハ通路ナシ

吾川郡

横浜

潮ハ山迄

瀬戸

潮ハ山迄

御曼瀬

亡所潮ハ山迄但家ハ三ヶ一屋具計残ル勝浦浜モ亡所

浦戸

潮ハ山迄

長浜	潮ハ雪蹊寺ノ院内迄西ハ日出野限り又民家ニモ流家ハ鮮シ
東諸木	潮ハ大堤限り戸原ノ家少シ流ル
西諸木	潮ハ大堤限り西南ノ在家ニハ入ル
甲殿	亡所潮ハ山迄
秋山	潮ハ甲殿境ノ田丁迄
仁ノ村	三ヶ二亡所潮ハ山迄
西畠	潮ハ山迄流家鮮シ二淀川ノ潮ハ八田村ノ渡場迄
新居	亡所潮ハ山迄山腹ノ家少シ残ル
宇佐	亡所潮ハ橋田ノ奥宇佐坂ノ麓萩谷口迄山上ノ家一軒残ル在家ノ後ノ田丁ヘ先潮
渭浜	廻シケルユヘ通路ヲ失ヒ溺死四百余入
福島	在所尽ク海ニ没シ深サ五尋六尋アルナレハ別ニ記ス事ナシ
龍	上ニ同シ溺死百余人
井尻	亡所青龍寺客殿斗残ル蟹力池海ニ没ス
谷々多キ村ナレハ詳ニ記シ難シ大体潮ハ山ヲ限海際家不残流潮田ハ海	亡所
浦内	潮ハ山迄東横浪西横波ノ家ハ屋具斗残ル鳴無大明神ノ拜殿ニモ潮入潮田ハ海
東奥浦	

西奥浦 潮ハ山迄家ハ高キ所ユヘ無事潮田ハ海  
押岡 潮ハ在所中半迄流家ナシ  
神田 吾井郷 亡所谷々ノ民家田苑少シ残ル  
土崎 多ノ郷 潮ハ名越坂ノ麓松力瀬川ノ奥迄家ハ少シ残ル  
亡所民家田苑海ニ没ス山上ノ家少シ残ル  
池ノ内 潮ハ本村ハ賀茂明神ノ奥ヲ限り大間ハ山迄流家鮮シ大間ヨリ名越ノ麓マテ一面ノ海ニナリ往  
須崎 還山ヲ遶ル  
潮ハ田丁迄当所ノ池今在家ノ二ツ石ト云所ヨリツキヌケ海ニ連ル家ハ事ナシ  
亡所潮ハ山迄池ノ内村ノ池ヲ近年新田トナス其溝渠深サ二間横三間斗当所ノ故倉ト云所ヘ通  
ル初ノ地震ニ橋々落ケルニヨリ湊ヨリ湧入ル潮ニ溺死スル者三百余人今在家モ亡所  
下分 亡所潮ハ山迄坂ノ川ト云山溪ノ在家少シ残ル樹木竹篁尽ク流失シテ望洋如レ涯リ  
半亡所潮ハ上分村ノ大境<sup>ヲ</sup>遶越ノ川限り  
下郷 野見 亡所潮ハ山迄  
大谷 半亡所潮ハ山迄山腹ノ茅屋三軒残ル  
安和 亡所潮ハ山迄山腹ノ家ハ残ル  
久礼 人凡ソ國中潮入ル所々溺死スル者五人十人或ハ廿人ナキ事能ハス種崎宇佐福島須崎久礼ノ大  
ヲ書シテ小ヲ書セザル者ハ事繁ケレハナリ

上加江	亡所潮ハ山迄
小矢井賀	潮入ケレトモ事ナシ
大矢井賀	上ニ同シ
志和	亡所潮ハ山迄
小弦津	潮入ケレトモ事ナシ
大弦津	上ニ同シ
与津	亡所潮ハ山迄
鈴	幡多郡
佐賀	半亡所潮ハ山迄
井田	亡所潮ハ伊与喜ノ大境白石迄山間ノ家少シ残ル
有井川	半亡所潮ハ山迄家ハ山上ニ有ル故多ク流レズ一ノ宮親王ノ古跡多ク埋没ス衣懸磐ト云岩モ定 潮高ク成ニヨツテ見ヘス
上川口	半亡所潮ハ山迄家ハ山上ニ有故中半残ル
潮ハ田丁下モ迄	
浮津	
鞭	亡所
潮ハ山迄山上ノ家ハ事ナシ	

口湊川

潮ハ山迄流家鮮シ

入野

亡所潮ハ山迄此浜ノ松林八幡賀茂ノ両社潮入トイヘトモ流レズ賀茂ハ式社也右松林ハ鞭ヨリ  
下田ノ口マテ連続シ其樹ノ直事竹ノ如クニシテ且長短モナク一国ノ壯觀ナリシカ所々キレ損  
シ或ハ打ヲリ根コギニシ又ハ根ヲ洗ヒ出シケルユヘ大半ハ枯木トナル林ノ中間ニ古ヨリ潮ミ  
チクレハ横二十間斗ノ江湾有ケルカ高潮ホリウカチ横四五町斗ノ海トナリ田丁六町ホト上ミ  
浪打際トナル此村ノ地高千三百石谷々ニ残ル所ノ田畠纔ニ九十石里人生業ヲ失フモ理リナリ  
亡所潮ハ山迄山上ノ家ハ全シ田丁ハ一面ノ浜ニナル矢玉猿飼ト云所ノ山間ノ薄田少シ残ル沙  
鹿持

漠渺々トシテ旅客迷レ津

下田ノ口  
亡所

上田ノ口  
潮ハ銅山ノ下迄流家少シ

田ノ浦  
出口

半亡所潮ハ飯積ノ麓迄平地ノ家ハ流ル

井屋  
上二同シ

下田  
亡所潮ハ山迄山際ニ屋具ハカリ残ル家少シアリ

鍋島  
竹島  
上二同シ

井沢

小津賀  
潮ハ田丁迄家ハ事ナシ窪田ハ海ニ成ル

佐岡 潮ハ田丁迄家ハ事ナシ後川ノ潮ハ敷地ノ中沢岩田ノ境大要寺ノ門前堤下迄  
中村 地震ニ家三ヶ二倒ル潮ハ田丁窪迄渡リ川ノ潮ハ岩崎脇田ノ池限リ  
宇山 潮ハ田丁残リナシ津野崎境ヘ十三端ノ船一艘打上ル家ハ高キ所故事ナシ  
津野崎 不破 潮ハ八幡ノ井松迄家ハ上ニ同シ  
坂本 潮ハ八幡ノ井松迄家ハ上ニ同シ  
山路 本村ノ潮ハ田丁迄木戸ト云所ハ家悉ク流但窪田ハ海ニナル  
真崎 潮ハ山迄家ニモ流家鮮シ田地残ラス海ニナル  
深木 潮ハ山迄家ハ山間故全シ田地中半海ニナル  
間崎 潮ハ山迄流家鮮シ田地中半海ニナル  
津藏渕 初崎 半亡所潮ハ山迄田丁中半海ニナル  
亡所潮ハ山迄一草一木残リナシ  
布本村亡所山腹ニ茅屋ニ軒残ル名鹿モ亡所立石ハ事ナシ  
下茅 亡所潮ハ<sup>チシヤノ</sup>木迄浜ヨリ行程一里故ノ市井ハ海底ニ沈淪シ<sup>カカン</sup>舸艦ヲ多ク繫キヌレハ外ニ可レ記  
ナシ舟ヲ壑ニ藏シ山ヲ沢ニ藏ス驚動再三  
鍵懸 大岐 亡所田苑一画ノ浜トナル  
亡所潮ハ山迄念西寺ト云寺并民家ニ軒残ル是皆山上ニ有ル故ナリ此外一草一木残ナシ田苑ハ  
一般ノ沙浜トナリ浩々乎トシテ暗ニ胡国ニ迷フ南ノ山下ニ湊生ズ久百モ亡所

以布利	亡所潮ハ天神山ノ峠五尺斗下迄市井海ニ没ス
窪津	亡所潮ハ山迄一王子ノ社斗残ル
津呂	在所高キ所ユヘ無事大谷モ同シ
伊佐	上ニ同シ
松尾	上ニ同シ
大浜	亡所潮ハ山迄
中ノ浜	上ニ同シ
浦尻	亡所潮ハ山迄
清水	亡所潮ハ越浦境ノ小坂ヲ打越ス山間ノ家少シ残ル鹿島ノ宮流ル
越	亡所潮ハ山迄賀久見ノ通路舟ヲ用ユ
賀久見	半亡所潮ハ山迄山間ノ家ハ残ル
養老	亡所
下猿野	半亡所潮ハ田丁残リナシ
三崎	亡所潮ハ山迄山腹ノ家少シ残ル田苑ハ一面ノ浜ニナル龍串ノ奇石埋没ス遺恨
爪白	半亡所潮ハ山迄汀ノ松樹悉ク流失
下川口	亡所潮ハ山迄山上ノ家少シ残ル
片糟	亡所潮ハ山迄
貝ノ川	亡所潮ハ山迄山腹ノ家少シ残

大津	半亡所潮ハ山迄
小才津野	亡所潮ハ山迄
才津野	潮ハ田丁残リナシ家ハ無レ事
尾浦	亡所
西泊	亡所潮ハ山迄
櫻ノ浦	亡所
周防方	亡所
小間目	亡所
赤泊	亡所
柏島	鳴ノ四面潮湧出シ堤ト一般ニナリシカトモ在家ニハ入ラス今年八月十九日大風雨波浪雲ヲ捲 汀洲ヲ打ハギ魚ノ網代モ損没シ民家残ラス潮ニヒタリ漁翁産ヲ失ヒ悲歎セシカトモ此ホトノ 難ヲノカレ愁喜忽地ヲカエタリ
天地	事ナシ
一切	亡所
福良ラ	亡所
榦	亡所
泊トマリ	亡所
橘	亡所
天地	亡所

小尽コヅシ

亡所

湊

亡所民家田苑海ニ没ス

伊予野イヨノ

潮ハ田丁残ナシ家ニモ入レトモ流レス

田ノ浦

亡所

小浦

亡所

内ノ浦

亡所

外ノ浦

亡所

坂ノ下

亡所

宿毛スカモ

亡所山腹ノ家少シ残ル

亡所潮ハ和田ノ奥或ハ牛ノ瀬川ヲ限ル初ノ地震ニ土館民屋一時ニ転倒シ火災天ヲ掠ムル折節高潮推入火炎車輪ノ如ニシテ良久ク波上ニ浮沈シ後ハ悉ク土居ノ前ニ漂イケルガ第三番ノ津浪ニ冲ヘ流レ出テ土居斗残ル錦家少シ流ル田苑ハ海ニ没ス此外貝塚大島深浦大深浦桃宇スネキ藻津右悉ク亡所

右國中潮入在々所々山迄打詰タル潮三分ノ一ハ速ニ減シ三分ノ二ハ定潮トナル凡ソ潮及ブ所ノ田畠ハ悉ク永荒トナリ餓殍野ニ満ントス可悲々々係リシ事ハ往古ノ様モ稀ナリ慶長九年ノ高潮ノ事ヲ阿闍梨アジャリ曉印ガ記録ヲ以推尋レバ東灘ノ破損ハ大体一般ニシテ西郡ハ其事伝ハラズ（但幡多郡佐賀ヘハ此時ノ潮家迄入ル此外ノ浦々云伝ナシ）

崎浜談議所ノ住僧權大僧都阿闍梨曉印ガ記録ノ略ニ曰慶長九年災多シ先一二七月十三日大風洪水ニ

二八月四日大風洪水三二閏八月廿八日又大風洪水四二十二月十六日ノ夜地震同夜半ニ大潮入テ南向ノ国尽ク破損ス西北向ノ国ハ地震計ト云当所ニハ五十人溺死西寺東寺ノ麓ニハ四百人甲浦ニハ三百五十余人宍喰ニハ三千八百六人溺死ス野根浦ヘハ潮不入不思議ト云ヘシ當所ノ潮ハ當寺ノ履脱ヲ限り或ハ中里鍛冶ガ庭川ハ船場名本力家ノ前又ハ八幡宮ノ高欄迄打詰ルト云々（右ノ潮此度ニ力ハル事ハナケレトモ夜分ユヘ溺死多キ歟）

天武天皇白鳳十三年十月十四日ノ夜地震夥シテ當國ノ田苑五十余万頃海底ニ没シヌルヨシ日本書紀二見ヘテ東寺ノ崎ヨリ足摺ノ崎迄ノ海湾ハ往昔ノ田畠ニシテ白鳳以来ノ海也ト國俗ノ伝称喧シトイヘトモ未レ詳ニセ其実否ヲ一トニカク此度ノ大変ハ當國ニ在テハ前代未曾有ノ更ナルベシ扱モ今年ハイカナル氣運ソヤ地震冬ヲ終テ不レ息去ル八月十九日大風雨ノ後ヨリ諸木花開キ偏ニ春ノ如シ秋毎ニ風雨スレバ必花サク事珍ラシカラズトイヘトモ十月四日ヲ過テ弥草木生カヘリ山ニハ楊梅実ヲ結ヒ野ニハ筍生出ル事夏ニ齊シ斯ノ如ンハ孟仁力孝感モ見ニ至ス鄙人ノ叶ハヌタトヘニハ師走ノ楊梅也ト談笑セシモ興サメ兒ナリ又駿州ノ災ヲ聞ケバ十一月廿二日未ノ刻ヨリ明ル廿三日辰ノ下刻迄地震甚シテ民家一字モ不残転倒ス同日ノ刻富士山夥シク動搖シ其響天地ニ瓦リ男女多ク絶入ス然シテ後富峯ノ雪消流シ黒煙巻テ猶々天地鳴動シテ富士郷中一片ノ煙ニ時斗ウツ巻ケレバ互ニ膝ニヨリ肩ニ傍テ両手ヲ以額ヲ抱キヲメキ叫フ漸ク黄昏ニ及ケレハ黒煙變シテ火炎トナルスマシナント云ニ言ノハナシ（十二月十日此迄山猶々焼ルト云）折節南風烈シクシテ富峯ノ火氣ヲ吹送リケレバ甲州三縹矢檜尾ト云所ハ山林民家一時ニ焼亡シ居民残ナク燒死ト聞ユ又江府ハ十一月廿三日海底迅雷ノ如ク轟キ出ヅ諸人コハ如何ト周章スル所ニ亥ノ下刻俄ニ天色変ジ明ル寅ノ下刻迄城中其外諸大名ノ第邸地震ナラズシテ鳴動スル事甚シ世ニ是ヲ屋鳴ト

云同廿四日午ノ中刻ヨリ炉灰降<sup>ル</sup>其降始メハ雪ノ如シ同夜子ノ刻マデ降カサナリ地ニ積事六七步<sup>ビ</sup>ノ灰ハ白ク夜ノ灰ハ黒シ是皆富山ノ余恠ナルヘシ

右同年ノ珍事ユヘ併セ錄ス昔桓武天皇延暦十九年三月十四日ヨリ四月十八日マテ富士山ノ頂キ自ラ燃<sup>モヘ</sup>テ屋<sup>ヒル</sup>ハ煙リ暗ク夜ハ火光天ヲ照ス其声ハ雷ノ如ク灰ノ下ル事雨ノ如シ山下ノ河水皆紅ナリト記セリ又清和天皇貞觀六年五月富士山燃テ十余日ニシテ火消ス山上ノ磐石崩テ海ヲ埋事三十里計人家モ多ク崩ル始ハ浅間ノ方ヨリ燃出テ後ニハ甲州ノ方ヘ焼移ルトイヘリ

### 谷陵記後序

予嘗官<sup>ニ</sup>遊<sup>シ</sup>四方<sup>ニ</sup>頗<sup>ル</sup>知<sup>ル</sup>ニ本邦之地理<sup>ヲ</sup>焉今也再ヒ周<sup>ニ</sup>流<sup>シ</sup>海浜<sup>ニ</sup>一回シテレ頭<sup>ヲ</sup>却<sup>テ</sup>恠<sup>ミ</sup>レ入<sup>事ヲ</sup>ニ異方<sup>ニ</sup>駅馬行<sup>ハ</sup>行問<sup>フ</sup>レ津<sup>ヲ</sup>馬僅熟視<sup>テ</sup>レ予<sup>ヲ</sup>曰公称<sup>ニ</sup>史遊<sup>ト</sup>一跨<sup>テ</sup>レ馬ニ遡<sup>リ</sup>郊外<sup>ヲ</sup>不<sup>ル</sup>知某郷某<sup>ノ</sup>浦<sup>ヲ</sup>者ハ何ソ也予默識<sup>スル</sup>事良久<sup>フシテ</sup>漸<sup>ク</sup>認<sup>ニ</sup>出<sup>シ</sup>昔日之地方<sup>ヲ</sup>一拍<sup>テ</sup>レ掌<sup>ヲ</sup>大息<sup>シ</sup>顧<sup>テ</sup>奴隸<sup>ヲ</sup>一曰嗚呼哀哉此レ罹<sup>ル</sup>十月四日之厄<sup>ニ</sup>者也從レ此至<sup>テ</sup>レ彼<sup>コニ</sup>曲湾抱<sup>キ</sup>ニ海潮<sup>ヲ</sup>或洲渚渺茫<sup>トシテ</sup>白鷺群<sup>カリ</sup>水鷗喧<sup>キハモト</sup>故ニ市井也國家之承平長久也良賀富農閭閻撲<sup>チ</sup>レ地<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>余<sup>一</sup>寸歩<sup>ヲ</sup>一大廈高堂勢起<sup>レ</sup>雲<sup>ヲ</sup>長棟横梁氣吐<sup>ク</sup>虹<sup>ヲ</sup>倉廩喰々トシテ長<sup>ニ</sup>望<sup>ム</sup>ニ霜雪<sup>ヲ</sup>今其<sup>レ</sup>安<sup>ンカ</sup>在乎汝亦応<sup>シ</sup>記<sup>ス</sup>レ之<sup>ヲ</sup>其回視<sup>シテ</sup>而不助<sup>ニ</sup>予<sup>カ</sup>歎息<sup>ヲ</sup>何ソ也狂濤沂リ<sup>レ</sup>山<sup>ヲ</sup>怒涛鼓<sup>ツ</sup>レ丘<sup>ニ</sup>見<sup>テ</sup>ニ之<sup>ヲ</sup>咫尺<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>驚レ不<sup>レ</sup>驚者蓋在下有<sup>ト</sup>レ意<sup>ニ</sup>与<sup>ニ</sup>上無<sup>キ</sup>レ意<sup>ニ</sup>乎昔今之控引<sup>ニ</sup>耳曉滄海茫茫々又復早晚<sup>カ</sup>為<sup>ニ</sup>桑田ト<sup>ニ</sup>耶有<sup>テ</sup>レ感<sup>ニ</sup>乎詩人谷陵之歎<sup>ニ</sup>聊<sup>カ</sup>取<sup>ト</sup>ニ毫<sup>ヲ</sup>於客舍立<sup>ニ</sup>二云

宝永四年臘月日

寛政十一年春三月写之

森芳材藏<sup>印</sup>

奥宮正明識

## あとがき

昭和南海地震が起きてより、70年を過ぎようとしている。地震列島日本に、安全な場所は皆無といってよい。

今年4月、熊本地方を震央に発生した熊本地震は、「起きないと思っていた」人々に衝撃をもつてむかえられた。しかし熊本に地震が起きないわけではなく、「忘れた頃」にやつてきたというだけのことだった。そしてこの地震は、平均120年周期で起きる南海トラフ地震とは異質の、内陸活断層のずれによる地震だった。震度7が2回という、観測史上初の結果もあるいはこの活断層の複雑さゆえだつたのだろうか。

平成23年3月の東日本大震災は、死者・行方不明者18000余人という悲惨な結果をもたらした。仙台の東方沖を震源としたため大津波が発生し、三陸のリアス式海岸の諸地方をいちごに呑み込んだからである。またこの地震は福島第一原子力発電所をも襲い、原発の安全性という点で大きな問題を提起した。

もう少し前には同16年に新潟県中越地震、同7年に阪神淡路大震災があった。次の南海地震がいつやってくるのか、過去に被害を大きくした高知県に住む私達にとつて、「神のみぞ知る」などと悠長なことを言つていてはいけない。科学的知見と歴史上の事実をよく学び、常に「その時」に備える心構えであらねばならない。

本書は、同25年12月から27年5月まで、「読売新聞」高知面に「災害をたどる—残された教訓ー」と題して連載した全50回を一冊としたものである。連載が限られていたため、大半は地震と津波についてやしている。台風、地滑り、大崩壊は付記した程度にすぎず、これは他日を期したい。

小稿は、ほとんど高知県だけを対象としただけに中央での刊行は考えなかつた。高知県内のどこかでと思案していたところ、その有意義さを知ったミタニ建設工業株式会社代表取締役・会長三谷勝水氏が、高知柏ライオンズクラブ会長に就任されたことから、同クラブの結成40周年記念事業の一環として採用せられ、つまり今回の出版に至つた。三谷会長には心より御礼申し上げると共に、氏を紹介して下さつた島崎順也氏にも厚く謝意を表しておきたい。

連載中、高知大学名誉教授・工学博士の山崎堯右先生、また高知地方気象台中平昭彦地震津波防災官、一級建築士山崎俊一の3氏には専門的なことで御助言頂き、その他、南国市教育委員会生涯学習課油利崇氏、須崎市の郷土史家香崎和平氏には、地域の特定で御世話になつた。写真提供で御協力頂いた各市町村とあわせ、御礼申し上げておきたい。読売新聞高知支局では、担当デスク立花宏司氏に格段の御理解を頂き、気持ちよく仕事をすることができた。末筆ながら同様御礼申し上げておく。（皆様の肩書きは執筆当時）

平成28年7月吉日

松岡  
司



**KOCHI KASHIWA LIONS CLUB**

## ライオンズクラブ

ライオンズとは、英語のスペルで「L・I・O・N・S」ですが、次の単語の頭文字より構成されます。リバティの「L」、インテリジェンスの「I」、アワーの「O」、ネイションズの「N」、セーフティの「S」……。

日本語に訳しますと、「自由を守り、知性を重んじ、我々の国の安全をはかる」です。

このスローガンを掲げ、ライオンズクラブ国際協会は、アメリカ合衆国シカゴの保険業者でありました、メリキン・ジョーンズの夢が始まりました。

彼は、地元のビジネスマン達が、職業的な事だけを考えず、地域社会、更には、世界全体の改善に、視野を広めてはいけないだろうか?と、考えました。当時、ジョーンズ自身のグループであつた「シカゴ・ビジネス・サークル」は、これに同意し、アメリカ国内における他の類似グループと連結しました。1917年・大正6年6月7日に、「ライオンズクラブ国際協会」は誕生いたしまして、1925年・大正14年に開催された国際大会において、有名な偉人、ヘレン・ケラーが「ライオンズよ、暗闇との戦いで、盲人の騎士となつて下さい」と発言して依頼、ライオンズは特に視力障害者への奉仕に貢献をしています。2016年3月現在、世界(211)の国と地域に、(46,725)のクラブを持ち、140万4千人以上の会員を有する世界最大、且つ活動的な奉仕団体と各国で評価され、2017年に百周年を迎えます。



## 高知柏ライオンズクラブ

高知柏ライオンズクラブは、1977年、昭和52年2月20日に、高知桂ライオンズクラブのスポンサーにより、日本で2116番目に誕生し、平成29年2月に40周年を迎えます。

クラブ名の「柏」は、旧土佐藩主・山内家の家紋より由来します。さらに、スポンサークラブ「桂」との関連性で、何れも似通つた高木、「桂」と「柏」は共に手を携えて、ライオンズ発展のために邁進しようという「願い」をこめて命名をされました。

結成以来40年間スポンサークラブ、ブラザークラブ、地域社会の皆様の温かいご指導どご支援をいただきながら、「We Serve」をモットーにライオニズムの高揚と地域に根ざした奉仕活動として、児童養護施設「南海少年寮」支援、24時間テレビ「愛は地球を救う」募金活動への34年にわたる参加・協力など独自の継続的なアクティビティのほか、献血奉仕など自ら汗を流し心のふれあいを大切にした幅広い活動に取り組んでまいりました。

結成40周年を契機に、ライオニズムの原点に立ち返り存在感のあるライオンズクラブとして地域奉仕や国際協力の実践に精進を重ねてまいります。

## 松岡 司（まつおか まもる）

昭和18年（1943）、高知県佐川町生まれ。法政大学大学院日本史学専攻修士課程中退。佐川町立青山文庫館長を経て、現在は執筆や講演活動を行う。

著書に、『土佐勤王党首領武市端山—未公開史料の紹介—』（私家／武市新一版）『武市半平太伝—月と影と—』（新人物往来社）、『中岡慎太郎伝—大輪の回転—』（同）、『土佐藩家老物語』（高知新聞社）、『定本坂本龍馬伝—青い航跡—』（新人物往来社）、『歴史街道佐川』（佐川町立青山文庫）、『宰相野中兼山伝』（富士書房）、『異聞・珍聞龍馬伝』（新人物往来社）、『正伝岡田以蔵』（戎光祥出版株式会社）など多数。

---

# 南海地震と災害をたどる — 残された教訓 —

---

二〇一六年十一月一日

著者 松岡 司

発行者

高知柏ライオンズクラブ

高知市鷹匠町一ー三ー三五

(三翠園ホテル内)

TEL ○八八一八七五一七二六〇  
FAX ○八八一八七三一九三四四

印刷 共和印刷株式会社

---

高知柏ライオンズクラブ 結成40周年記念  
ライオンズクラブ国際協会 100周年記念

